
Valche 《ヴァルチェ》

加那 翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァルチェ
Valche

【Nコード】

N8895V

【作者名】

加那 翔

【あらすじ】

ある日を境に魔法が存在することが当たり前になった現在。

この世界には『魔物』や魔物を倒すための武器『魔導器』も存在していた。

その『魔導器』と契約出来た学生しか通うことができない……【クラリア魔法学院】

そんな学院になんの偶然か、通うことになった主人公『柊隼人』。

彼は魔法の素質はあるが『魔導器』と契約出来なかった《欠陥魔導士》だった。

果たして“欠陥魔導士”柊隼人はこの学院で何を思い、何を成し遂げるのだろうか。

prologue (前書き)

初めまして、加那 翔という者です。

……一度でも自分の作品を見てくださった方、おはようございます。

今回の小説は、ライトノベル的なものにしようと思ってます。

これからよろしく願います。

そして、誤字・脱字などあったら報告、願います。

prologue

【魔物】――それは今から100年前に突如、世界全国に現れた化け物の総称。

魔物達は、目についたもの全てを破壊し尽くした。

それを黙って見過ごすわけにもいかず、人々はそいつを倒すため戦った。

だが、傷一つつけることも出来ず、無残に殺された。

そして魔物に対処するため、人々は魔物を倒す方法を必死に考えた。

そんなとき、ある武器を作る実験が成功した。

――それは当時、バカにされていた研究員が作った武器。

その名も、ヴェルジュ【魔導器】。

世界には無いとされていた異能の力……『魔力』を使って能力を発揮する武器のことだ。

“あのバカが作った武器では絶対に倒せない”

周りの人々はそう思っていた。だが、結果は人々の予想の真逆。研究員が魔導器を使って魔物を切ると、たちまち魔物は消えた。

結果、化け物を殺す手段は出来た。

――その手段は、研究員が使った魔導器を使って敵を殺すことだった。

だが、その魔導器を使うには、使い手に魔法の素質があることや自分にあつた魔導器との契約が必要だった。

そしてその100年後……つまり現在。

――魔法の素質がある学生を専門に集め、

立派な【魔導士^{ヴァルチエ}】に育成をするための施設……【クラリア魔法学院】。

この物語は、^{ストーリー}その学園に遅れて入学することになった少年のお話です。

prologue (後書き)

……この小説のタイトル、間違えてないかな。
ヴァルチェ
魔導士にしてみただけど、スペル間違えてないよね？

間違えてたら気軽に報告してください。お願いします。

第1話 The start is an event.

「ここが、今日から通うことになる【クラリア魔法学院】か」
とても大きく、立派な校門の前に立ちながら呟く俺……柊 隼人。
家庭で色んな事情があって、入学式に間に合わなかった一人の学生だ。

なので、転入生扱いになっているらしい。

その証拠に基本的に黒く、ところどころに赤のラインが入っている学院指定の制服ブレザーを着ている。

「それにしても、大きな門だな」

（こんなに門を大きくする意味ってあるのか？）

今、俺の目の前にはとてつもなく大きな門があった。

あまり詳しくはわからないが、5メートルぐらいだろうか？
もしくは5メートル以上あるかもしれない。

「で、それは置いておいても良いとして……」

遅れてきた場合って、どうやって入ればいいんだろうか？と、不意に思う。

このクラリア魔法学院は、学生寮があって基本的には外出できない。つまりは、外出することなんてあまりないので、この校門の通り方がわからないということだ。

それに俺も場合、家の都合で遅れると報告を入れていたんだけど、学校側から何の連絡もきてないんだよね。

「これって、どうしたら良いんだろうか？」
ツンだ？と思いつながら視界を動かすと、その横に少し小さい門を見つけた。

「……こつから入れそうだな」
小さい門を軽く押してみると、それだけで軽く開いたので学院内に入る。



「それにしても、本当にこの学院は大きいな」
さっきから職員室を探して学院内を歩き回っているんだが、全然、見つからない。

それどころか、ここに通っているはずの生徒の姿さえ見つからない。
(さすがに誰一人として生徒を見てない、っていうのはおかしいな)
この時間だと、普通に授業をしてるはずだが……。

『……おい、学院内にはもう誰もいないか？』

『ああ、こいつ以外誰もいねえぞ』

「っ!？」

不意に聞こえた男の声――声だけだったら驚くようなことでもない。仮にも学院なのだから、男の教師や女の教師など色んな人がいるだろうからな。

だが、俺が驚いたのは声じゃなく、男達が話した内容のほうだ。

（学院内にもう誰もいない、ってどういうことだ？）

顔には出していないが俺はかなり動揺していた。

そこで俺は男達の話聞いておこうと思い、会話が聞けるように物陰に隠れながら近づく。

『それにしても、この学院は不幸だな。

有名すぎるから、こんな被害を受けたんだからな』

『まあ、そうだな。で、ボスはなんて？』

ボスっていうことは、人数は多いのか。と物陰に隠れながら思う。

『……いや、まだ何も。人質の前で交渉をしようと思って、

体育館の舞台でしようと思ってるんだが中々、学園長が交渉に応じなくてな』

なるほど……。ってことは、確実に教師は体育館にいるな。

「で、こいつはどうする？」

「……っ!!」

かなり近くまで来た時、やっと気づいたのだが、男達の足元に四枝をかなり頑丈に縛られた女の子がいた。あまりの恐怖にか、宝石のように綺麗な瞳から涙がポロポロと溢れていた。

（こんなの見てしまったからには、絶対に助けねえとな）
物陰に隠れながら、もしもの為に持って行けと母親に言われ、半場、強制的に持たされた拳銃を構える。

（こんなところで使うことになるとは思わなかった。
強制的だったけど渡してくれて、ありがとう、母さん）
心の中で、子供のことを一番に考えてくれていた母親に感謝する。
そして次の瞬間、真剣な表情で少女を見つめる。

「……こんなことが起こったら、両親は心配するよな」
男達に聞こえないよう、ボリューム音量を落として呟く。
それと同時に拳銃も男達に向ける。

「そりゃあお前、殺すに決まって……」
男が物騒なことを言い終える前に……

（だから、君は絶対に護ってやるよ。俺が）
心の中で呟き終えた後、狙いを男達の右胸に定め一発ずつ撃つ。

「ぐあっ」

「うぐっ」

俺が放った銃弾は男達の左胸にあたり、男二人は倒れそうになる。

「……お前も道連れにしてやる!!」

が、男二人のうち一人が、最後の反撃のつもりか、少女に狙いを定める。

(しまった!!間にあえー!!)

もう死んだだろ、と思って油断してた俺は、急いで少女の下へ走っていく。

何故、こんなに必死に彼女を護ろうとしてるのかも、俺にはわからない。

「ぐっ……」

少女を護るために体を使って、

少女に銃弾が当たることは阻止したが、その代わり、右胸に銃弾を受ける。

そのせいで、銃弾を受けた場所から制服が赤く染まっていく。

「ごめん、大丈夫だった?」

出来るだけ傷を見せないように少女の縄を解いていく。

「……は、はい。だ、大丈夫です」

少女は俺に気を使わせたくないからか、気丈に振る舞うが体がぶるぶると震えてるので、説得力はない。けど、これは仕方のないことだよな。

魔法の素質があったって怖いものは怖いんだから。

「そう、良かった……っ!？」

安心した瞬間、右胸に激痛が走る。

くそっ、これじゃあ体育館に行けないじゃねえか。

「私は無事でも、あなたは……」

激痛で悶える俺を見て、少女は更に泣きだしそうになっていた。

「だ、大丈夫。俺が勝手にしたことだから気にしないで」

これは君を護りたいと勝手に思って、勝手に助けて勝手に怪我を負っただけだし。

「ですが……」

この少女は諦めが悪いだろうな。と、思ってこっちが先に折れる。

「なら、頼みたいことがあるんだ」

「なんですか？」

俺が頼むのは、たった一つの願い事。

「――今から、体育館にいる全員を助けたいんだ。手伝ってくれないか？」

第2話 R e s c u e o p e r a t i o n

「……ここか」

俺は“一人”、体育館前まできていた。

そして中の様子が見たいので、体育館の扉を少し開き中を覗く。

中を見ると、舞台にはいかにもボスっぽいやつと、

学園長なのかはわからないが妙齢の女性が話していて、

舞台の下には、全校生徒であろう大勢の生徒がいた。

ーでも、なんで魔法を使わないんだ。

そう思っていたのだが、すぐに疑問は解決した。

『なんでアンタらには、魔法が効かないのかしら?』

『ふっ、それはな。この特殊スーツのおかげだ』

……なるほどね。そういうわけか。

こいつらが着ている妙なスーツは、対魔導士スーツってことね。

「お前、そこで何をやっている!!」

不意に後ろから声が聞こえたため、

後ろを見てみるとさっきのやつらと同じような服を着た男がいた。

なるほど、これが魔法を反射する特殊スーツで、手には拳銃を持っていた。

（そりゃあ、この装備じゃあ魔法学院もやばいよな。

魔法が使えないうえに敵は拳銃を持ってるからな）

「……おい、話を聞いてんのか!!」

考え事をしていたせいなのだが、男には無視していたように見えただろう。

いきなり、掴みかかってくる。

「そんなに近づいて言わなくても、聞こえてんだよ!!」

「ぐあっ」

男を体育館内に放り投げ、瞬時にポケットから拳銃を取り出し3発撃つ。

「お前、何者だっ!!」

ほら、お前のせいで見つかったじゃねえかよ。

そんな思いを込めて足元に転がっている男を見る。

「俺か？俺は……ただの“欠陥魔導士”だ」

ベルトにつけている代えのマガジンを手に持ち、リロードしながら
呻く。

ディヴァルチェ

欠陥魔導士——それは魔法の素質はあるが、

どの魔導器とも契約できなかった出来底なりの魔導士のこと。

「欠陥魔導士だと……」

俺の言葉に驚くボスらしき男。

「ええ、説明はしなくても知ってますよね？」

今では魔導士・魔導器関係の話はほとんど毎日してますから」
主にテレビや新聞でな。

「なるほどな……。お前がその有名な魔導士の欠陥品ってわけか」

「ええ、まあ」

「フッフ、ハハハハハッ」

魔導士の欠陥品だと、肯定するとボスらしきやつは大げさに笑いだす。

そのとき、俺は体育館舞台のよこにかけている時計をチラッと見る。

（今の時間は、9時55分。約束の時間まであと5分……）



〃〃30分前〃〃

「私がそんな難しいことをしないといけないんですか!！」

学院の廊下、物陰に隠れながら俺達は作戦を考えていた。
そしてアイデアは出たのだが、それはかなり難しい作戦だった。
俺的にも……、彼女的にも。

「ああ、それしか全員を無傷で助ける方法がない」

「で、できませんよ。私にそんな作業……」

「無理を承知で頼む。これしかないんだ」

彼女に向かって、必死に頼む。

「……もう、この作戦しかないんですよ」

「ああ、そうだ。これしかない」

「わかりました。……ですが、学院に誰もいないとはいえ、
この作業には時間がかかるので、35分ぐらいください」
肯定すると、彼女も覚悟が決まったのか首を縦にふる。

「35分か……。それ以上、縮まったりしないか？」

「無理です、この学院はセキュリティが厳しいので」

「……わかった。なら、そっちは頼むぞ」

「了解です」



「はははははっ、これは傑作だな!!」

お前ら魔導士が忌み嫌っている欠陥品に、助けられるなんてなあ！

「ああ、なんで笑ってんだ？頭、可笑しいんじゃないの。と思ってたけど、

そうじゃなくてそっちに笑ってたのか。

「……はあ、俺はどちらかといえばお前らの頭のほうが傑作だと思うがな」

「ああ？」

事実を言うと、男は笑うのをやめ、こちらを睨んでくる。

(あと2分……)

「だって、そうだろ？この学院は、魔導士の中では中立なんだぜ。

だから、欠陥魔導士でも、素質があれば入学してオツケーなんだよ。それにバカにも、してねえしな。この学院の先生方は……」

逆に、欠陥魔導士の人に来て欲しい。って、言われたけどね。

なんでも、今までできた生徒の中で欠陥魔導士はいなかったらしい、だから逆に気になるから来てください。と、ウチの親に頼み込んだからな。

「人を嘲笑う前に、真面目に勉強したほうが良いんじゃない」

「……調子、乗ってんじゃアねエよ。欠陥品風情がア!!」

俺の台詞にムカついたのか、胸ポケットから拳銃を2丁、取り出す。そして男は、まるで暴走したかのように俺に向かって乱射してくる。
(こいつ、完璧にキレてるな)

間一髪のところでは銃弾を避けながら思う、俺。

「ぐっ……」

銃弾を避けていると、不意に右胸に痛みを感じる。

――傷口が開いたか。

「おらおら、どうしたどうした? もう、疲れてきたのかア?」

「まさか、それよりお前のほうが疲れてきたんじゃないやねえの。主に頭
の」

だが、今の状況では傷を直すことも休むこともできないので避ける
ことだけに集中する。

「そんな軽口叩いても、俺にはわかってるんだぜエ。

てめえ、右胸の辺りを怪我してるだろう」

男は銃弾が切れたのか、リロードしている。

だが、片方の拳銃にはまだ弾が残っているのか、

俺に標準を向けたままなので、迂闊に動くことができない。

「……何のことだ?」

「恍けたって無駄だぜえ。その黒い制服でもわかるぐらい染みてる

んだからよオ」

（チッ、やっぱバレたか）

バレなければいいな。とは思ってたが、やっぱ無理だよな。
受けた本人でもわかるぐらい、かなり深い傷だし。

ふと時計を見ると、長い針は10時を示し、短い針は0のところを示していた。

（……時間だな）

そう思うと、思わず笑みが溢れてしまう。

「まあ、バレたんならしかたねえ。俺も一つお前に教えてやるか」

「あア？なんだよ」

俺に両手の拳銃を向ける男。

「……周りを見たほうがいいぜ」

――刹那、決着をつけるかのように拳銃の音が体育館に響いた。

どこかから放たれた銃弾は、見事に男の両腕に持っていた拳銃だけに当たり、

「なっ!？」

いきなりのもので慌てた男は、拳銃を離してしまう。

「チェック・メイト」

それに乗じた俺は拳銃を強く握りながら、男の額に銃口を当てる。

「……チッ、これまでかよ」

「さようなら」

心底、悔しそうな男に俺は短く呟いてから、引き金トリガーを引く。

第3話 **S e t t l e m e n t** (前書き)

おはようございます。加那 翔です。

今回で序章は最終回になりますが、
どうぞ、よろしく願います。

P・S 今回、後書きに今までに出てきたキャラの特徴を
纏めますので気になる方は是非、見ていってください。

第3話 Settlement

「……はあ、疲れた」

犯人達を捕まえた直後、俺は息を深く吐きながら床に倒れる。
そして制服のボタンを全て外して傷口を見る。

（やばいな。この傷は深すぎるだろ……）

「隼人君！！大丈夫！？」

体育館二階から飛び降りて俺の傍まで走ってきた少女がいた。
おいおい、そっから飛び降りて怪我したりしねえのかよ。

「ああ、一応、大丈夫だぜ。だから心配すんなって」

ちなみにその少女は、さっき助けていた少女だ。

なぜ、彼女が俺の名前を知っているか？

その理由を話すには時間を犯人と戦う前まで遡る。

〓〓1時間ぐらい前〓〓

「――で、君には体育館の2階から銃を使って敵を倒してほしいん

だよ」

「2階からですか！？そこから拳銃を撃ってもめったにあたりませんよ」

ああ、そっか。そこからだと拳銃を使ってもあたらないよな。

「拳銃とかなら無理でも、スナイパーライフルとか使ったらどうだ？」

「ライフルですか……？」

俺が出した提案ならいけるかも知れないのか、悩む少女。

「それなら出来るかも知れませんが、肝心のライフルがありませんよ」

「そう、それが問題なんだよな……」

どこかに置いていたりしてないかな。そんなことを思っていたときだった。

突然、少女が思い出したかのように、「あっ」という声をあげた。

「どうした？」

「いえ、実はこの学院には

もしものときのために武器庫があるんですけど」

武器庫か……。

でもそれがあるってことは、もしかしたらスナイパーライフルもあるかもな。

「でも、先生しかロックを解けないんですよ」

「じゃあ、君は武器庫にいつてくれ。」

もしかしたら先生が遠隔で解除してくれてるかもしれないし。まあ、ロックされててもどうにかして解除してくれ」

「私がそんな難しいことをしないといけないんですか!!」
学院の廊下、物陰に隠れながら俺達は作戦を考えていた。
そしてアイデアは出たのだが、それはかなり難しい作戦だった。

俺的にも……、彼女のにも。

「ああ、それしか全員を無傷で助ける方法がない」

「で、できませんよ。私にそんな作業……」

「無理を承知で頼む。これしかないんだ」

彼女に向かって、必死に頼む。

「……もう、この作戦しかないんですよね」

「ああ、そうだ。これしかない」

「わかりました。……ですが、学院に誰もいないとはいえ、この作業には時間がかかるので、35分ぐらいください」
肯定すると、彼女も覚悟が決まったのか首を縦にふる。

「35分か……。それ以上、縮まったりしないか？」

「無理です、この学院はセキュリティが厳しいので」

「……わかった。なら、そっちは頼むぞ」

そういつて俺は彼女から離れて体育館を目指そうと立ち上がる。

「了解です。……あつ、そうでした」

「ん、どうしたんだ？」

「私のことはこれから【彩葉】いろはって呼んでください。

仮にもこれから一緒に作戦をすることになった仲間なんですから」
少女……彩葉はまるで天使のような笑みを浮かべながらいう。

俺はそれに思わず、見とれてしまっていた。

「……わかった／＼なら俺のことも隼人でいいよ」

彼女が名前を覚えてくれたので、俺も教えることにする。

「はい、わかりました。隼人君」

「ああ、作戦開始だ」
オペレーション・スタート



そういうわけで、俺達は名前を教えあっていたのだ。

まあ、今となってはどうでもいい話だが。

で、もう一つだけ言っておくと、ボスの拳銃を撃ち落としたのも彼女だ。

「でも、こんなに血が……」

「大丈夫、大丈夫。」

俺はこんくらいじゃなんともねえよ」

彼女にそれだけ言って立ち上がろうとする。

「……………」

「ふぐつう!?!」

が、いきなりの激痛に思わず悶え苦しむ。

若干、涙目になりながら痛みを感じた場所を見ると、彩葉が俺の傷口に手を当てていた。

「ほら、やっぱり無茶してるんじゃない!!」

俺みたいに傷が痛むわけでもないのに、目から大粒の涙を流す彩葉。そして耐え切れなくなったのか、俺に抱きついてくる。

「つ……ごめん。彩葉」

それに痛みを感じつつもあまり顔には出さないようにする。――顔に出したら、またこの子は自分のせいにするからな。でも、1つだけ言いたいことがある。

それは――、

「でもさ、ここで抱きついてくるのはやめてくれない?」

ほら、他の生徒達が見てるし」

俺がそう言うとき彩葉は今いる場所を思い出したのか、周りを見た後、顔を真っ赤にしていく。

「……っ／／／／／」

「なっ?」

そして茹でタコのように顔を真っ赤にした後、
彼女は真っ赤に染まっている自分の顔を見られたくないのか俯く。

「……し…」

「し？」

し、から始まる言葉ってなんだろう？

そうして考えていると、彩葉は何を思ったのかライフルを持つ。

ちよつと待て、武器^{それ}を持って……、

し、から始まる言葉ってあれしか思い浮かばないんですがっ!？

「死んでくださいっ!!／＼／＼／」

ほら、やっぱりな!!

「つて、ちよつと待った。俺、怪我人なんですけど!!」

傷を見せびらかすように言ってみる。

「そんなの知りません!!」

女の子に恥をかかせたんですから、責任とってもらいます!!」

おいおい、お前が心配してた傷だろ？

そしてなんで傷を増やそうとするのかな、訳がわからないんですが。
Why?

「お前のいうその責任は、確実に死ねることだよな!!」

断固、拒否する。そしてお前ら全員笑ってないで、止めてくれ!!」
こうして史上最悪な始まり方で、俺の学園生活は始まったのだ。

第3話 Settlement (後書き)

() 中の言葉は作者の裏話です。

キャラクターファイル 1

柊 隼人

主人公。短い茶髪と深い蒼色の瞳が特徴的。

(ぶっちゃけ『生徒会の一存の杉崎健』を
思い浮かべながら書いてた)

水城 彩葉

主人公が助けた少女。

背中にかかるぐらい長い黒髪を
ツーサイドアップに結っている。

(これまた外見だけモデルにしたキャラがいて、
『緋弾のアリアの峰理子』です。髪の色や性格は違いすぎますけど
ね)

第4話 Duel not admitted

「……はあ、本当に面倒くさいな」

あの事件を終え、無事に彩葉の攻撃からも避けきった後。

俺は職員室前まで来ていた。

というのも、何でも転入するためには教師と戦い実力を示さないと
いけないのだが、

俺の場合、全員を救った特典みたいな感じで試験なしでいいらしい。
まあ、その代わり書類を書かないといけならしいけどね。

コンコン

30

「失礼します。柊 隼人です」

そういつて中に入ると先生達、全員の視線が俺に向かってきた。

普通に考えると『あの子が欠陥魔導士なんだ？』って感じだよな。

ホント、なんで俺はあんな言葉を大声で言っちゃったんだろうな…
…。

別にあんな台詞をいう必要はなかったのにな。

「……ああ、よく来てくれたね。柊君」

職員室の奥の方から見るからに偉い立場にいるであろう、銀色短髪の男性がこちらに向かってきた。

「柊です。これからよろしくお願いします」

「ああ、よろしく。俺はお前の担任になる紅^{くれない}玲也^{れいや}だ。さっそく、一つ確認しときたいことがあるんだが」

俺の担任になる人か……。でも、結構偉いほうの人っぽいな。さっきまで周りの先生達がこっちを見ていたけど、紅先生と話してから見てこなくなっただけだ。

「はい？ なんででしょうか」

「お前が“欠陥魔導士”^{デイヴァルチエ}っていうのは本当なのか？」

「ええ、本当ですよ。診断してもらってもそうでますし」
笑いながらそういうと先生は反応に困ったみたいで、かなりわかりやすい苦笑いをしていた。

――別に笑ってくれても良いんだけどな。

「そうか……」

「で、先生。俺を呼び出した理由はそれだけですか？」

「いや、それだけではない。俺と一緒にクラスまでついてきてもらう。
転入生として挨拶をしてもらわないとな」

……やっぱりそうなるよな。

だけでもあんな空気の中、挨拶をするのは困るんだよな。
何を言ったら良いのかわからないし。と、

予想していた流れとまったく同じになったことに、がっくりしながら思う。

「はあ、了解です」

軽くため息をつきながら返事をする俺。

「なんだ？なんか不服そうだな……」

「そうではないんですけど。なんか転入してきたときの空気が嫌なんですよ。」

珍しいものを見た、みたいな感じで見られるのが

今まで何回も転入したことあったけど、どこでもそんな感じだったしな。

「……なるほどな。だが、ここなら大丈夫だと思うぞ。」

俺のクラスのやつらは逆に興味を示すかもな。良い意味で「良い意味で、ね。」

まあ、その言葉が本当かどうかは見てから考えたらいいや。



「それじゃ俺が呼ぶまでここで待ってろよ」

「……了解です」

俺に忠告だけして先生は教室に入っていく。

（それにしても、なんか急に憂鬱になってきた……）

『……というわけで、転入生ー！入ってこい』

帰ろうかな？と、考えていたらいつの間にか時間は経っていたらしい。

教室の中から先生の声が聞こえ、呼ばれたのでドアを開けて中に入る。

「全員、知っていると思うが、

さっきの事件で俺達を助けてくれたヒーローの柊隼人だ」

そして中に入ってわかったことを言うと、

先生の言った言葉の意味がわかった気がする。

珍しいものを見たっていう感じなんだけど、

なぜか嫌じゃない。そんな空気だった。

（これが先生の言ってた言葉の意味か。

なんか始まってばっかだけど、このクラスならやっていけそうな気がするな）

「ええっと、先生がいうようなヒーローではないですけど……柊隼人です。」

皆より知識も魔力も少ないですが、これからよろしくお願いします」
自分の中での満面の笑みを浮かべながら言う。

（やべえ、なんか挨拶を間違えたかな？）

そう思って焦っていたのだが、みんなの反応は俺の予想と完璧に違った。

女子達は頬を軽く赤くし、

男子達には嫉妬的な感情が込められた視線で睨まれた。

まあ、男子達の中にも普通にしているやつはいるけど、な。

（ーってか、なんでそんな視線で睨まれてるわけ？）

別にそんな嫉妬されるようなことしてないんだけどな。と思う。

「はい、というわけで柊からでした。で、柊の席は……っと」

無理矢理、話を終わらせる先生。

いつもならそれに怒るのだが、

今回に限っては話を終わらせたほうがありがたいので、スルーする。

「水城と霧島の間の席が空いてるな。そこでいいか？」

（水城ってもしかしてー）

先生が指さしたほうを見ると、空いている席があり、

その隣の席に彩葉とその反対の席には男子生徒が座っていた。

「あー、はい。良いですよ」

「なら、柊はその席につけ」

やっぱり水城って彩葉のことか。と納得しながら席に向かう。

そして席に向かうため、水城の横を通るその瞬間。

「……悪かったな」

「えっ!？」

取り乱すようなことを言ってしまった俺も、悪かったと思ったので謝る。

すると、水城は戸惑ったような感じの声を出す、俺は無視して席につく。

また、謝り返されてもこまるしな。

「へえ……」

右隣の男子生徒が独り言のように何か言っていたけど気にしない。

「では、自己紹介も終わったことだし、真面目に授業でも……」

「ふざけんなよ」

授業を始めようとする先生に愚痴を言う男子生徒。

いや、この場合……俺への文句になるのかな? タイミング的に。

「なんでオレが欠陥品と一緒に授業を受けないといけないんだよ」
ほらきた、やっぱりな。

絶対にいるんだよな、

ディヴァルチェ

こういう欠陥魔導士だからって見下すやつ。

「……それになんでこいつは入学出来たんだ。魔法も使えないくせに」

その言葉を聞いて俺は完璧にキレた。

「ああ? 文句言ってるんじゃないよ。それとも何ですか?」

お前の口からは文句しかでてこないんですかね?」

「何だと!」

挑発すると簡単に乗ってきた。

(こいつ、バカだな)

「ああ、バカの頭では一回で理解できませんか」

「デメエ……」

あと一押しだな。

「文句しか言わない負け犬は黙ってろって言ってんだよ!!」
俺がそう宣言すると同時に男子生徒は魔導器バカヴェルジュを起動させる。

「デメエはここで殺す!!」

剣型の魔導器で俺に切りかかってくる。

同時に女子達の悲鳴や、男子達の絶叫が教室中に響きわたる。

「……甘いな」

が、俺は冷静にポケットから拳銃を取りだし、それで剣を受け止める。

「なっ!?!」

それに驚く生徒達だが、特に驚いていたのはバカだった。

まあ、そりゃそうか。自慢の剣を欠陥品に防がれたんだからな。

しかも魔導器ならともかくただの拳銃で。

「どうした……。俺に喧嘩売るのやめておくか？」

——まっ、それが妥当だろうな。威張ってるくせに実力のないお前

なら」

ブチッ、という音がバカから聞こえた気がした。
まあ、こんな台詞言われたらムカつくよな。

俺でもムカつくよ。言うがわは超楽しいけどね。

「ふざけるのも大概にしろ!!」

その叫びと同時に剣に力が入られる。

……無駄な力を抜けよな。

「よっと!」

持っていた拳銃をほんの一瞬だけ手放し、剣を大きく振らせる。
そしてもう1つの拳銃をバカ目掛けて構える。

「しまった!?!」

銃口を向けられている直前、そんなことを言っていたが無視だ。
俺がバカに銃口を向けたほんの少しあとに、拳銃が地面に落ちる音が響きわたる。

「チェックメイトだ」

こうして教師が認めていない状態での決闘は、俺の勝利で終わった。

第4話 **D u e l n o t a d m i t t e d** (後書き)

今回は自分の作品の中ではかなり長かったかな。
いつもは平均、1500から2000だからですけどね。

とまあ、雑談は置いておいて。

いかがでしたでしょうか、第4話。

一言、言いますと、バトル描写が難しいですね。

なんかこれをみてて光景が予想できないんですね。

なので読者からの指摘は絶賛、

受付中ですので、気楽に送ってください。

第5話 Explanation of rally

「……で、なんでこうなるわけ？」

俺こと柊隼人は目の前の光景を見て呟く。

「だーから、言ったじゃないの。」

あなたじゃ絶対に隼人君には勝てないって」

「うるさいな、勝てるかもしれないだろ!!」

さっきまで決闘をしていたバカと彩葉が姉弟のように言い合っているのだ。

ってか、二人とも。なんで俺の話で言い合ってるんだよ。

「それはあなたが一番強いからじゃないですか？」

俺の席の隣に座っていた金髪の男子生徒が、いつの間にか俺の隣まで来て言ってくる。

まあ、俺の疑問に答えてくれたのは良いんだけどさ。

「……俺、口に出してたか？」

これはかなり切実に思う疑問。

俺的には口には出してなかったと思うんだけどな。

「いえ、口には出してませんでしたけど、顔には出てましたよ」

「……さいですか」

どんだけ顔に出やすいんだよ。と、心の中で落ち込む。

でも、まあ、仕方ないっちゃあ仕方ないかな？

ここ約5年間ぐらい人と話してたことなんてなかったし。

「柊君？」

「ん……ああ、悪い。ちよつとぼうつとしてた」

「いえ、それは別に良いんですけど。」

……辛くなったら相談してくださいね。いつでものりますから」
もしかして過去のことを思い出してたとき、少しでも暗い表情にな
っていたのか。

で、それが気になって俺のこと心配してくれたのかな。

「ああ、サンキュー。」

これから辛くなったら相談させてもらうことにするよ」

「ええ」

満面の笑みを浮かべながら言ってくる金髪男子。

……俺が女だったら絶対にこの笑顔で堕ちてたな。

まっ、女子だったらっていう仮定の話だから、俺が堕ちることはな
いけどね。

「……つと、失礼しました。自己紹介がまだでしたね。」

僕は【霧島 きりしま 修史 しゅうし】、そこで喧嘩している姉弟の幼馴染です。よろ
しく願います」

右手を差し出してきたので、俺も右手を差し出し握手をする。

「ああ、よろしく。――俺は……」

「あなたは別に良いですよ。さっき名前は聞きましたし」

ああ、そういえばそうだったな。なんか色々あったせいで忘れてたよ。

特に誰かさんとの勝負のせいで。と皮肉を込めながら彩葉弟を睨む。が、あいにくと睨まれている本人は、まだ姉と喧嘩中なのでこっちに気づいてはいない。

「ん、じゃあ自己紹介はしないけどこれだけは言っておく。

これから俺のことは隼人と、名前で呼んでくれ」

「ええ、わかりました。では、これから隼人と呼ばせていただきます」

別にそんな堅苦しくしなくても良いんだけどな。

と、思いつつも気にしないようにする。もしかしたらクセなのかも知れないしな。

「ではさっそく、隼人……僕のこと修史と呼んでください。

名前呼びのほうが落ち着くので」

「ああ、これからよろしくな。修史」



「……ええっと、色々あって話を続けることができなかったが」
そこまで言って俺を睨んでくる先生。

えーっ!!アレ、俺の責任になるんですか？

どっちかっていうと、喧嘩うってきたあっちのせいじゃんかと、恨みを込めて水城弟を睨む。(本日2度目)

「まあ、それは置いておいて。今月の末に、【学年混合チーム対抗戦】がある」

黒板に学年混合チーム対抗戦。と書きながら言ってくる。

字の通りに予測すると、学年入り乱れてのトーナメント戦ってところかな？

「最低でもクラス代表の1組は出さないといけないんだ。その他は参加自由だけだな」

……なるほどね。絶対に1組は参加しないといけないってことか。そして優勝を目指す、と。

「でも、先生。学年混合だったら、上級生に当たる可能性が……」
そういえばそうだな。俺らは1年生なのに、3年生を当たったりしたら確実に負けるしな。

「ああ、それなら問題はない。

非常事態を除いて、手加減をしてくれるように設定してるんだ」
ふーん、なら上級生と当たっても心配はしなくても良いってわけか。

「なるほど。それなら大丈夫ですね」

質問した生徒はそれで納得したのか、それから話すことはなかった。
「それでだ。本当なら皆で決めるところ、今回は特例で俺が独断で決めた」

先生の言葉を聞き、全員が『えーーーーっ!!』『』と言う。

「うるさい。では、発表するぞ。」

選手は全員で5人だ。順番に言っていくぞ」

さあ、先生が推薦する5人は誰だ？

「水城^{みずぎ} 彩葉^{いろは}・水城^{みずぎ} 悠里^{ゆうり}・霧島^{きりしま} 修史^{しゅうじ}・アイリス・スカーレット」
へえ、やっぱり水城姉弟と修史は入ってるんだ。というか、アイリスって誰だ？

俺はまだ知らないよな。聞いたことないし。

「そして最後の一人は………柊 隼人。お前だ」

「……ですよね。わかってましたよ」

予想してた理由は、俺が“欠陥魔導士^{ディヴァルチエ}” っていうかなり珍しいモノだからな。

ディヴァルチエについて詳しく説明すると、よくわからないモノらしい。

魔法の素質はあるが、魔導器を使うことはできない。

これは噂で聞いた話なのだが、ディヴァルチエのための魔導器もあるらしい。

が、俺には関係ないことだ。ーいや、ディヴァルチエだから関係

はあるのかな。

まっ、これらを纏めて一つだけ言えることがある。

それは――ディヴァルチェはかなり珍しいということだ。

過去にいたディヴァルチェ全員を合わせても10名前後。

そして30年前以上も前に生きていた、

【ゼファー・ミレニウム】以降、ディヴァルチェの姿を見ることはなくなった。

その30年後にディヴァルチェが生まれてきた。勿論、そのディヴァルチェが俺だ。

だから、30年ぶりのディヴァルチェということで注目される。

（まあ、俺はディヴァルチェってこと、政府には言っていないけどな）

「と、言うわけでこの5人には絶対に出場してもらうが、他の人はフリーだ。

出場して自分の力を試すもよし、見学して強い生徒の戦いかたをパクるも良しだ」

そういった後、タイミング良くチャイムが教室中に鳴り響く。

「ああ、チャイムが鳴ったからこれまでにするが、さっき呼ばれた5人は作戦会議しておけよ」

チャイムを聞いた先生はそれだけ言って、急いで教室を出ていく。

――あの人、絶対にさっさと終わらせたかったよな。

チャイムになった瞬間、かなり嬉しそうな顔をしていたし。

（作戦会議か……。確かに作戦は必要かな。
全員、どんな武器かも知らないし）

第6話 Strategy meeting(前書き)

最近、P S 3が壊れてテンションが落ちた加那 翔です。

と、いうのも買いたいソフトがあつてですね。

そのためにお金を貯めていたのですが、修理にお金が消えてしまったからです。

……はぁ、不幸だ。

ちなみに買いたいソフトは【T O X】でした。

第6話 Strategy meeting

「ーと、いうことで作戦会議をしますよ!」

担任の先生から学年混合チーム対抗戦の話を聞いた後の昼休み、俺は中庭に来て缶コーヒーを飲んでいた。

そんな俺のところに修史は来て、そんなことを言ってきた。

(えー、めんどくさいな)

さっきと違って作戦会議をやろうとする気力すら無くなった俺。というのも、あの話が終わってから授業の先生がめんどくさかったからだ。



〓〓3時間目の場合〓〓

「そういえば、柊君!!」

「あ、はい!! なんででしょうか?」

いきなりテンションをあげて呼ばれるから、俺はビックリして大きな声で返事をしてしまう。

「あなた、欠陥魔導士^{ディヴァルチュ}ってホント!?!」

「……まあ、そうですね」

授業始まってから10分後、何故か知らないが俺の話が変わった。

「先生……」

先生のテンションの上がりようを見て、おそろおそろ手をあげる名前も知らない生徒。

「あ、はい。なんででしょうか？」

「ディヴァルチェってそんなに凄いですか？」

いや、すごくはないと思うぜ。

若い魔導士にディヴァルチェっていうと、

『欠陥品だー！！』的なノリでバカにしてくるぐらい。

だが、先生はー

「凄いに決まってるじゃないですか！！」

「えっと……でも、ディヴァルチェって、欠陥魔導士って書きますよね？」

「それはですね。今から約60年前、魔導士の欠陥品なのに、自分らより活躍するな。と思ったバカな魔導士が付けた名称ですよ。実際はディヴァルチェのほうが強かったです」

へえ、その話は聞いたことなかったな。というか、バカな魔導士って。

先生、あなたは世界中の若い魔導士を敵に回すつもりですか？
バカな魔導士ってのは、あってはいますけどね。

「そして凶悪な魔物《》を倒したのも大魔導士【ヴァン・セプテット】と言われていますが、

事実はその親友、ディヴァルチェ【ゼファー・ミレニウム】が倒し

「たんだ。という説も出てますし」
ふーん、そんな話もあったのか。
全然、知らなかったよ。というか、この先生、歴史に詳しいな。

それにしてもー

ーゼファア・ミレニウム……か。

「え、でも、それは説ですよね？」
「そうですね。……ですが、ヴァンはゼファアが倒したと言っていたそうですよ。」

でも、バカな魔導士達は、『あんな欠陥品に出来るわけがないだろ』と聞かなかったそうです。

なので、事実に近いのはゼファアが倒した。という説ですね」
まあ、これは歴史を長く勉強している人しか知らない情報ですけどね。と付け加える先生。

（なるほどな。だからこんなに詳しいのか……）
ただ、ためになった話だから俺的には良いんだけど……

勉強はしなくて良いのかよ!!と、心の中で全力でツツコム俺であった。

〃〃4時間目〃〃

3時間目と似たようなものなので、以下省略。



「さあ、作戦会議をしますよ。

そのために場所も人数も揃えてきたんですから」

何故かテンションの上がっている修史の後ろから、3人の女子がきた。

……マジですんのかよ。作戦会議。

「……はあ、わかったよ。

で、どこで作戦会議をするつもりなんだ？」

「屋上です」

そういつて修史は、ポケットから屋上の鍵を取り出す。

まあ、屋上だったら良いかも。息抜きも出来るし。

「了解」

それだけ言って、屋上に向かう。

(ってか、なんで転入1日目から息抜きが必要なんだよ)
そんなことを心の中で思いながら。



「うわっ、これは凄いな」

「そうですね……。これはさすがに予想外でした」

「まあ、これくらいあってもおかしくはない……。かな？」

「……国が建てるようなものだしね」

「あはははは……」

屋上についた俺達一行の反応はこれだ。

ちなみに上から俺・修史・彩葉・アイリス・悠里の順番だ。

こんな反応になるのもおかしくはない。

周りを見渡してみると、ガラス張りの机や

かなり良い素材を使っているであろうシートなどが大量にあったからだ。

しかも都合良く机1つにシート5つというセットで。

「いくら国立といっても、これはないだろ。
それにこんな雨でも降ってきたら……」

シートや机がやばいことに。と言おうとしたが、彩葉のある言葉によって言えなくなった。

「あ、それは大丈夫みたいです。ここの真上に結界が張ってますからね」

「ああ、なるほどね。だからここに豪華なセットを置いてても大丈夫なのか」

でも、これは良い環境だよな。

気持ちの良い風を浴びながら、友だちと話したりできるのだから。

ただ……外にこの環境はないと思う人もいるかもしれないけどね。俺は良いと思う派だけどな。これだと寝やすいし。

「じゃあこの学校の話はこれぐらいにして、作戦を話し初めましょうか」

修史の言葉に全員が首を縦に振る。もしくは肯定の言葉を使う。

「作戦を練る前に簡単に自己紹介でもしましょうか」

「そうですね。それが良いかも知れません」

確かにそれは良いかもな。自己紹介は全員の性格がわかるって言うし。

「別にいいわよ。反対する理由もないし」

「確かに。個人的に自己紹介したくないやつはいるけどな」

悠里は俺を睨みつけながら言う。

ってか、俺が何したってんだよ。何もしてないだろ。

それなのになんで睨まれないといけないんだよ。……理不尽すぎる。

「では、言い出しっぺの自分から……霧島修史です。

えっと魔導器は【フリート】といって、細長く先っぽがひし形のよ
うな形状の槍です。

これからよろしくお願いしますね。みなさん」

「よろしく、修史」

「ええ、よろしくね」

俺とアイリスだけ返事をする。でも、あとのやつはしなかった。

……ああ、そっか。幼馴染って言ってたな。

「えっと、霧島君。魔導器を見せてもらってもいい？」

アイリスが小さく手をあげながら言う。

「ああ、そうですね。見てもらったほうが早いですね」

そういうと修史は手を上に挙げる。

すると、近くに存在する魔力が修史の手に、そして槍状に集まって
いく。

そしてそれが完璧な槍の形になったとき、形成される。

「これが僕の魔導器、【フリート】です」

血に染まっているのかと思うぐらい紅い色の槍を持ちながら言う。

「……これって、Aランクの魔導器じゃないの!？」

そんな槍を一目見て驚いたのか、アイリスは声をあげる。

Aランクってなんだ？魔導器にランクってのがあるのか？

「ええ、そうですね。」

でも、まだ完璧に使いこなせてはいないんですよね」

苦笑を浮かべながらそんなことを言う。

そしてそれを言い終えた頃にはすでに魔導器は消えていた。

「では、次は彩葉で……」

「あ、はい。私は水城彩葉といいます。と、いつでも今更ですね。ここにいる全員、私の名前は知っていますし」

ああ、そうなんだ。

修史は幼馴染、悠里は弟だとしても、アイリスとも知り合いだったのか。

……交友関係広いな。

「魔導器は、【ツインバレット】と言います。

まあ、これは自分でつけた仮の名前なんですけどね」

そう前置きをして彩葉が形成したものは、二丁の銃だった。

（……あの銃、超カッコイイじゃん。やべえ、テンション上がってきた）

彩葉の手にある銃を見ながら思う俺。

それらの銃は、かなり豪華な服飾がついているのだが、邪魔にならない程度なので超カッコイイわけだ。

まあ、この説明だけでわかると思うが、俺は超がつくほどかなり銃好きだ。

なので、銃とかを見るだけで自然とテンションがあがるってわけ。

「彩葉」

「え、あ、はい。なんですか？」

「ちよっと、その銃貸してくれない？」

俺は彩葉の目を真剣に見ながらそう頼んだ。

「ああ、はい。いいですよ」

すると、わかってくれたのか。銃を乗せた手を差し出してきた。

それを受け取ろうと、手を差しのばす。

「姉さん、渡しちゃダメ!!」

「えっ!？」

それを俺が受け取る直前、そんな言葉を聞いたような気がしたが、時、既に遅く。銃に手を持っていた。

「ど、どうしたの?悠里」

「適合した魔導器を他の魔導士に渡すと、異変が起こるっていうんだけど、何もないの?」

ありえないようなモノを見るかのように俺を見る悠里。

「ん、何もないが?」

うわっ、やっべえ。

この銃、リアルにかっけえんだけど!!

超、こんな銃欲しいな。今度、モデルガンでも良いから作ってもらおうかな。

「う、うそでしょう?普通の魔導士なら異変があるはずなのに……」

「それならアレじゃないか?俺って普通の魔導士じゃくて欠陥魔導士だし。と言う。」

「……なるほどね。まあ、それならありえなくもないかな」

「ま、そういうことだ。」

あ、銃、見せてくれてありがとね」

そういつて俺は彩葉に銃を手渡す。

「いえいえ、これぐらいどうってこと……」

銃を直した直後、彩葉は少し顔をしかめ、俺の顔をじっと見始めた。

「ん、どうしたんだ？」

「……いや、何でもない。気のせいみたい」

「そうか……」

なんだったんだろう。

さっき一瞬だけ顔をしかめたような気がするんだが、皆が気にしてないみたいだから、良いか。

「それじゃあ次は、悠里かな？」

「……水城悠里だ。魔導器は【シャングリラ】っていう。

剣型の武器だけど、見た目はわかるよな？ さっきこいつと戦ったときに見せたし」

俺を指差し言ってくる悠里。

「ー確かにお前の魔導器は全員、見たと思うけどさ。一応、説明しようぜ？」

「えっと、私はアイリス・スカーレット。

魔導器は【フォーマ】。形の特徴を簡単にいえば弓です」

アイリスの手の平に具現したのは緋色の弓だった。

弓か……、なんか珍しいな。

外国の人なのに日本の武器を使うなんてな。

「……これで自己紹介は全員、しましたね」

「え、隼人君はしてないけど？」

「いや、俺は別に言わなくてもいいだろ。

名前はさっき言っただろうし、ディヴァルチェだから魔導器もねえしな」

まっ、武器は拳銃を使うけどな。と付け加えたように言う。

「――さて、全員の武器がわかったところで、作戦会議を始めましょうか」

第6話 **S t r a t e g y m e e t i n g** (後書き)

更にどうでも良い話ですが、

自分がしたことのあるテイルズシリーズは、

T O A ・ T O V ・ T O G ・ T O G f などです。

……今、思いかえすと最近のやつばかりですね。

第7話 Tactical training

「今日の実習は、個人戦闘についてだ。

ウチには毎年、何万件もの魔物討伐の仕事が入ってくる。

まあ、この仕事には主に2〜3年を中心としてつくことになっている。

のだが、稀にお前ら1年生にも回ってくることもある」

作戦会議を終え、今は午後の実習の時間。

俺達……1年A組の全員は訓練所に整列して、紅先生の話を黙って聞いていた。

「……これは本当に極稀な話だが、

教師でも難しいような依頼が1年に1回それも個人にくるときもある」

（そんなときって本当にあるのか？

絶対にはないと思うんだが。ってか、その前に教師が止めるだろ）

「そんな状況になったとき、必要になってくるのは力だ。

そして、それがなかったら待ち受けるのは死だけだ」

真剣な表情をして言う紅先生。

その光景を全員が息を飲みながら見る。勿論、その全員に俺も入っている。

「まっ、そんな仕事にお前らを就かせるわけないけどな」
さっきまでの表情から一転、笑いながら言う紅先生。

まあ、そういうのはわかってたよ。
教師が生徒にそんな難しい仕事に就かせるわけねえしな。

「だが、もしかしたらこんな状況になる可能性がある。ということだけは覚えてくれ。

そしてそんな最悪なケースを防ぐために、この実習をするということも」

「ーやっぱりそんな依頼に就かせることもあんのな。極稀にだけど。

「……話が長くなってしまったな。まあ、まだまだ話しておきたいことは大量にあるんだが、

これではせっかく設けた訓練の時間が台無しになるな。

さっそく訓練を始めるぞ。まずは、出席番号1番のやつから……」
先生のその言葉をきっかけに訓練が始まる。

そして1番の人だけ先生のところまで行き、

他の人達は自分の順番が来るまで、待つため壁付近に向かった。

それにしても……

（出席番号1番からか、なら俺はまだまだ先だな）
だから寝ていいかな？かなり眠たいんだけど。

「隼人、別に寝てもいいですよ。

出番がくる直前になると、起こしますので」

「サンキュー」

修史にお礼だけ言い、壁にもたれて目を閉じる。



「……や……、お……く……」

「……うう」

誰だ……？さっきまでグッスリと寝てたのに、起こしたやつは。

「隼人、起きてください。」

もうすぐあなたの出番になりますよ」

ああ、修史か。

そういえばそうだったな、出番になったら起こしてくれて頼んだな。

「……悪い。かなり眠っちゃってたみたいだな」

「そうですね。起こし始めてもう10分ぐらい経ってますからね」

ニコッ、と満面の笑みを浮かべて言う修史。

ぶっちゃん顔は笑っているように見えるのだが、目は笑っていない。

（なんか、自分的にはその笑顔が怖いんですが……）

「……あははは。で、結果はどうだったんだ？」

「あー、総合評価はAでした」

総合評価とは、クラリア魔法学院独自のシステムの一つであり、魔法・格闘・射撃・戦術など、個人の戦闘能力を測るための数値だ。なお、この数値のランクは、S・A・B・C・Dの順番になっており5ランクある。

そして修史は総合Aランクだから、かなり強いということになる。

……まあ、総合評価だから、4つのうちどれかがCランクかも知れないけどな。

ちなみに4つとは、さっき説明した魔法や格闘などの4つの数値ね。

「そりやすげえな。完璧じゃねえか」

「いえ、そんなに良くはありませんよ。

彩葉やアイリスのランクはSですから」

「……えっ、あいつらSなのか？」

「ええ、そうですよ。そして僕と悠里はAランクです」

ちよっと待って、なんでお前らはそんなにランクが高いんだよ。おかしいだろ。

そして何で“ひ”から始まる俺より、先に“み”から始まる彩葉達がやってるんだ。

「それはですね……」

「おい、柊ー!!」

起きたんならさっさと用意しろ。後はお前だけ何だからよ」

「……と、いうわけです」

寝過ぎてたってわけか……。

寝過ごしていた俺のせいで予定を変え、俺を飛ばし他の人をするこ
とになったと。

そして修史は俺をずっと起こしてたってわけか。

「すみませんでした」

先生に謝罪しながら腰のベルトにつけていた拳銃を構える。

（あっ、そうだった。訓練のときぐらいは、

一応安全な銃弾を変えないとな）

銃弾が戦闘用だったことを思い出し、訓練用の銃弾……ゴム弾をリ
ロードする。

勿論、戦闘用の銃弾は回収したぜ。

「……準備は終えたか？」

「はい。一応、準備は終わりましたがけど良いんですか？
ヴェルジュ以外を使っても」

「ああ、別にいいぜ。戦闘能力を測る訓練なんだからな。
それに弾は安全な物に変えたんだろ？」

「ええ、あって気絶ぐらいのゴム弾にしましたよ」

仮にも魔法学院なのに、ヴェルジュなしでも良いのかよ。

まっ、俺としてはヴェルジュを使えないからそっちのほうがいいん
だけだね。

「おお、いいね。それで俺を気絶させてくれよ。
午後からの仕事がめんどくさいからさ」

笑いながら軽口を叩く紅先生。ホント、何言ってるんだかこの人は。

「お断りします。気絶させない程度に頑張りますよ」

「……可愛げのない生徒だな」

「それはすみませんでした。少し配慮が足りませんでしたね」
微笑みながら謝る。

「そういうところが可愛くねえんだよ」

と、言いながらヴェルジュを具現する先生。

手に魔力の光が集まり、出現したのは漆黒といってもいいぐらい真っ黒な剣だった。

「……それが先生のヴェルジュですか？」

「ああ、これが俺のヴェルジュ【ナイト】だ」

ナイトか……。これはどっちの意味なんだろう？

夜という意味か、騎士という意味のナイトなのか。

ま、どっちでもいいか。

（今は――）

「さて、準備はいいか？」

「ええ、いつでもどうぞ」

拳銃を強く握りしめ、試合の開始を今か今かと期待して待つ。

「では、始めるぞ」

（自分の全力で――戦うだけだ）

覚悟を決めるかのように、俺は目を瞑る。

「……始め!!」

勝負の開始の合図と共に目を思いっきり開き、先生に突っ込む。

「はああああ……っ!!」

「お前なあ……、真正面から突っ込んでくるなんてバカか」

先生は冷静に俺に問題点を指摘し、俺に向かって剣を振るう。

やばっ!! その対処方法、考えてなかった!!

「……なんてな」

俺に向かって振るわれた剣を拳銃で上手いこと受け止める。

「なっ!？」

そんな行動に出ると思わなかったのか、先生はかなり驚いていた。

（隙ありっ!!）

背中付近のベルトにつけていたもう一つの拳銃を、

空いている方の手で持ち、先生めがけて超至近距離で射撃する。

まともに喰らったらゴム弾だといっても、骨折はするだろうな。という距離だ。

そんな距離なのだが、俺が迷いなく撃てた理由はある。

「しまっ……っ」

バックステップで一步引き、体を捻らせたりしながら無事に避けた。と、思いきや少しゴム弾が掠ったのか、痛みに顔をしかめていた。

「先生、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。いやはや、困ったな」

一応、心配して言った言葉に笑いながら返す先生。

「どうしましたか？」

「いや、ただ単に今年の新入生は豊作だと思ってな」

「そうですか……」

……確かに豊作だろうな。

ウチのクラスだけで、少なくとも彩葉・修史・悠里・アイリスと強いやつらがいるからな。

（今、ふと思ったんだけど、俺ってどうなんだろうな？）

戦闘能力としては高い方だと思っているけど、

魔導士能力としては最弱だから強く方には入らないだろうな。

「これは俺も本気を出さないといけないかもな」

「本気ですか？」

「ああ、今まで本気をだしたことは滅多にねえな。

あったのは俺個人としての依頼だけだ」

おいおい、それって事実上、俺が最初ってことじゃね？

なんか急に戦うの嫌になったんですけど。

「あははは、お手柔らかにお願いします」

「無理だな」

……ですよね。
言ってみただけです、わかってましたよ。

「それじゃ次はこっちから行くぜ」

そういう終えた瞬間、さっきまでいた場所から姿を消していた。

「おいおい、これはキツイ……っての！！」

不意に口から文句が漏れながらも、キチンと攻撃だけは避ける。

ってか、いきなり後ろから切りかかってくるっていうのはなしだろ
！！

かなりビックリしたぜ。しかも俺じゃなかったら確実に喰らってた
だろ。

「おお、初見で《陽炎》をよけるなんて戦闘の才能があるんじゃない
かね？

しかもご丁寧に反撃までくれちゃってよ」

「いや、あれはマグレですよ。直感で動いただけですから」

そう、俺は直感で先生の攻撃をよけ、即座に反撃をしたのだ。
ぶっちゃけ反撃といっても腹を殴っただけだけだ。

「……直感で陽炎をよけたのかよ」

呆れたかのように言い放つ紅先生。

あれ、俺は悪くないよな？

なのになんでこんな呆れられないといけないんだ？

「あれはリアルに自分の直感にビックリですよ。

無事によけるとは俺も思ってたんですけどしたしね」

まさか、あんなに自分の直感が凄いと思わなかったぜ。

そしてよけた俺も凄いと思ったよ。

「……はあ、もういいや。」

戦う気がなくなった。というか、お前に勝てる気がしない」
「なんでですか？」と聞きたかったのだが、

聞くまでもなく理由がわかってしまったので、聞かないことにした。

（やっぱり直感や勘で物事を解決出来る人
って最強だと思うんだ。自分で言うのも何だけど……）

「柊、お前の結果だが……魔法 D・格闘 A・射撃 S・戦術
Aで、総合評価はDだ」

やっぱりそうなるよね。わかってはいたけども。

直接、言われるとなんかショックだな。

まあ、直ぐに立ち直れるけどね。約5秒ぐらいで。

『『えええええーっ！！』『』』

紅先生の評価を聞き、全員が大声をあげる。

それするのやめてくれ、超うるさいから。

「ま、妥当でしょうね」

そんな生徒達に紛れて俺は、冷静な判断だと思いい口に出す。

「ほう、お前は驚かないんだな。わかっていたのか？」

「いえ、別に。でもこの学院の立場を考えたら簡単ですよ。

国立である故に、国の命令には逆らえない。

……つまり魔法の素質がないものに評価はできない。というわけ
ですよね？」

「……………ああ、その通りだ。本当にすまない」

責任感が強いせいか、紅先生は俺に謝罪してきた。

（そんなのしなくていいのに。腐っているのは【魔法絶対主義】の国の上層部のやつらであって、あなたではないのだからさ）

「別に気にしてませんから。謝罪はやめてください」

「だが……」

「ディヴァルチェでありながら、

学院に入れてもらったただけでありがたいので、別に謝らないでください」

これは俺の心からの本音だ。

「ああ、すまっ……いや、この場合はありがとうかな？」

何とも言い難いような表情で謝ってくる先生。

（……なんでアンタがそんな顔してるんだよ）

短い期間の間だが、この先生のこととわかったことがある。

それは……責任感が強いということと、思っていることが顔に出やすいということだ。

「ええ」

短い返事を笑顔で済ます。

そして修史達がいる場所に向かおうとしたその瞬間……。

「柊……！なんでお前はこんな酷い目に合ってるのに笑ってられるんだよ……！」

空間を裂く勢いで訓練所に響く大声。

それにあわせて外野の全員は興味津々といった顔でこちらを見ている。

（なんだかな……、そんなに大声で聞いてくるのはやめてくださいよ）

注目されるじゃないですか。と、心の中でボヤきながら歩みを止め

る。

「……どうしようもないじゃないですか。

今更、どうにかできる問題ですか？違うでしょ？

ディヴァルチェに生まれたからには、もうその運命を受け入れるしかないんですよ」

先生に向かって短くそれだけ言い放ってから、俺は修史達のところまで歩いて向かう。

（そう、運命を受け入れるしか。ね……）

「よっ、終わったぜ」

修史達のところに戻り、手を軽くあげながら報告する俺。

「ええ、見てましたよ。いやあ、あなたの直感はすごいですよね」

そんな感じで戻ってきた俺に遠慮なく言ってくる修史。

「ははは……」

それが何故か俺の心にぐさつ、と突き刺さる。

まあ、理由としてはさっき言ってきた勘や直感のせいなんだけどね。なんでこんなに常人離れした勘や直感を持ってるんだか。

「まあ、確かにそうだな。」

こいつの勘や戦闘の才能はすごいからな」

一度、戦ったことのある悠里がそんなことを言うが、俺、お前と戦ったとき勘や直感を使ったりしたわけ？使った覚えがないんだが、ってかアレだな。

勘を使うってどういう意味だよ。自分で言ったことだけど、意味わかんねえ。

「……悠里にしては珍しいですね。人を褒めるなんて」

「うん、そうだね。」

今まで他人を褒めたことなんて、滅多にないのにね」

修史と彩葉、二人して俺の耳元で話してくる。

「へえ、悠里（こづつ）が褒めるのってそんなに珍しいものなのか。」

まあ、褒めることは少ないだろうとは思ってたけどさ。

「全員、注目しろ」

彩葉達……いつものメンバーと雑談をしていると、不意に先生の大声が聞こえた。

それによりクラスメイト全員が、先生の方をみる。

「あー、これで全員分、ある程度の能力値はわかった。」

ま、俺から言えることは一つだけだ。

この結果に満足せずに日々、鍛錬を重ね強くなれ。……以上だ」

言いたいこと全て言い終えたからか、訓練所から出ていこうとする紅先生。

だが、途中で歩みを止める。

詳しく言うとなんの顔を見た後、急に止まった。

「ああ、今、思い出したぜ。」

これを渡すのを忘れてたんだ。――柊、受け取れ」

ズボンのポケットからナニカを取り出し、俺に向かって全力で投げた。

それを危なげなくキャッチし、そおっと手の平を開く。

「……鍵？」

先生が投げてきたモノは、“二つ”の鍵だった。

「ああ、お前の寮の鍵だ」

いや、それはわかったけど。

「なんで二つなんですか？」

「……学園長からの贈り物だそうだ。」

詳しくは寮に置いてある机、上から二つ目の引き出しを見ろ。だと」
学園長からの贈り物ね……。

「わかりました。帰って確認しておきます」

「そうしてくれ」

今度こそ、帰っていく紅先生。

それを見届けてから、クラスメイト達は次々と訓練所を出ていく。
残ったのは俺・修史・彩葉・悠里・アイリスの5人だった。

「で、どうする？」

「そうですね……。学年混合チーム対抗戦に向けて特訓したいところですが、

若干、一人がソワソワしていてマトモに特訓出来そうにないですからね」

「すまん」

ソワソワしているやつが誰だかわかってしまったので、即座に謝る。
「ま、良いですけどね。」

僕だってあんな感じに渡されたら、気になりますし」

「あ、やっぱり修史君もなんだ。私も若干……」

やっぱりあの渡し方は気になるよな。

というより、学園長からの贈り物という一言がかなり気になるんだ
けどね。

「じゃあさ、これから皆で隼人の部屋の整理にいかない？」

転入初日だから、荷物が溜まってて一人じゃ纏めるにも時間がかか
りそうだし」

おお、それは俺的にも助かるな。

だけど、アイリス。お前って俺の事、名前で呼んでたっけ？
まあ、いいや。気にしないでおこう。

「……それはナイスアイデアですね。行きましょう」

アイリスの提案に何故か乗り気の修史。

「そうだね。私達だけ特訓しても意味ないしね」

あれ？なんでだろうか。

彩葉の口調が棒読みしてるみたいに聞こえるんだが。

「まあ、姉さんが言うなら、オレも手伝うけどさ」

そしてなんでお前も乗り気なんだよ、悠里。

（お前ら、絶対に学園長からの贈り物が気になるだけだろ）

と、目の前の光景を見ながらつくづく思う俺であった。

第8話 The past of sadness

「ここか……」

鍵についていた番号……283番と書かれた紙を見ながら呟く。

ちなみに部屋の目の前にいるのは俺、一人だ。

なんでもみんなは一旦、自分の部屋に戻ってきてから手伝いにくるらしい。

「……つと、ずっとこうしても意味ないな。さっさと入ろう」

自分の部屋となる場所の鍵を開け、中に入る。

「へえ、屋上するときも言ったけど、

さすが、国立学校だな。部屋の内装が豪華すぎる」

一面、白を基準とした落ち着いた色合いで、床にはカーペットも敷いていた。

そして家具にもお金をかけていた、収納出来る引き出しつきのベッド（モダンライト付き）や、

3人ぐらい一緒に座れる長い革張りソファーなど、色々なものが置いていた。

「……これは、さすがとしか言いようがないんだけど」

思わず顔が引き攣る。

なんで、こんなところに金をかけてるんだよ。クラリア学院!!

「まっ、でも、あまり手をつけなくていいってのはありがたいな」

さっそくソファーに深く腰掛けながら、持ってきた荷物を解く。

「……いや、これは今しなくてもいいよな。今はそれよりもこつちだ」

あいつらが来てからでいいや。

そう思い、先に先生が言っていた鍵の方を調べることにする。

（気になったままでは作業もはかどらないしな）

自分にそう言い聞かせる。それでもしれないといい訳にならないと思っただからだ。

……って、なんで言い訳をしないといけないんだよ。意味、わかんねえ。

この家に二つあるうちの勉強机の方に向かう。

そして上から二つ目の鍵付き引き出しを開ける。

すると、そこに入っていたモノは――

「……ネックレス？」

蒼い宝石がついているネックレスだった。

宝石の形は、ゲームとかで良くあるクリスタルのような形だ。

「なんで学園長は、コレを俺に……」

俺には学園長の意図や、思想がわからなかった。

だが、俺に渡してきたことに意味があると思い、もらっておくことにした。

ふと引き出しの奥を覗いてみると、その奥底に手紙らしき紙も入っていたのだが。

コンコン……

「あつ、はい。どうぞ」

いきなり響きわたるノックの音にビックリする。
が、修史達が来ると言っていたことを思い出し、慌てることなく対処する。

（……この手紙は後で見るか）

引き出しを締め、今は何も見なかったことにする。

「隼人、来ましたよ。って、おわっ!？」

「おう、良く来たな。」

……なんで、そんなに驚いているんだ？」

玄関に向かうと、直ぐに驚愕の表情で固まる修史が目に入る。

「……いえ、ただ僕のところより豪華だな。と思ひまして」

「はあ? どこも一緒にじゃねえのか?」

「いいえ、違いますよ。」

というか、自身の部屋代は親が出してくれることになってるんですよ。

だから、親が学院に出してくれた分のお金を使って家具とかを揃えるんです」

つーことはアレか?

この部屋の家具は全てあの人が出した。と、そういうことだよな?

（はあ、あの人は何でこんなに優しくしてくるんだよ。

“あいつら”みたいに、他人のフリをしてればいいものを）
過去の出来事を思い出しながら思う。

――いつも俺を支えてくれたのは母さんだった。

“あいつら”に無視されていたとき、相手にされなかったとき、嫌がらせを受けたとき、どんなときでも俺を支えてくれたのは母さんだった。

――“死にたい”

そう思って自殺しようとした俺を、止めてくれたのも母さんだった。
だけど俺にはそれが一番、辛かった。

俺のことを最優先にしてくれる。

それが一番、母さんにとって辛いことなんじゃないか？

俺のことをずっと助けてくれている。

それが原因で、あいつらから嫌がらせを受けてるんじゃないか？

そう思ったから、母さんのことを考え魔法学院こじに来たのに、
ここでも、俺のことを最優先に考えてくれるのかよ。

……ずっととは言わない。

だけど、ほんの少し――俺が魔法学院にいる間ぐらいは、
自分のことを最優先に考えてくれよ。……母さん。



「隼人……？大丈夫ですか？」

「ん、ああ、大丈夫だ。気にすんな。……で、他のやつらはどうした？」

心の中ではこの話を直ぐに終わらしたい。そう思ったからか俺はすぐに話を変える。

「……そうですねえ、もうすぐ来ると思いますよ。

よく言うじゃないですか。女の子は準備に手間がかかるって……」

修史はそんな俺の心境が伝わったのか、それに乗ってきてくれた。
(サンキュー)

恥ずかしくて口には出せないで、心の中でお礼を言う。
このお礼が、伝わってくれるといいな。と思いながら。

「ああ、確かにそういうな。だけど、なんでこんな大した用事じゃないのに、

こんなに時間がかかってるんだ？それに悠里は女じゃないだろ」

「いえいえ、大した用事じゃなくても用意してくるのが女の子なんですよ。」

「……悠里に関してはお姉さんの手伝いでしょうかね？」

ま、確かにあいつはお姉さん、至上主義っぽいもんな。アリそう。

「そうか……。なら、とっとと片付けちまうか？」

ここまで用意されてると、することあんまりねえし」

「……そうですね。そうしましょう」

「それじゃあ、お前はそっちのダンボールの中身を頼む。」

あそこの部屋に置いてくれればいいから。まあ、ほとんど本だけだけどな」

「はい。了解しました」

ダンボールを持って、俺が指さした方の部屋に向かう修史。

さてと、俺はコレでも解きますか。

(正直、これを使う気はないんだけどな)

あるダンボールの荷解きをする中、中には大量の武器が入っていた。
そんな大量にある武器の中、ある物を見つける。

ウチのオヤジが使っていたかつて魔導器^{ヴェルジュ}だったモノ。
そして現在では、使えなくなってしまった剣型のヴェルジュ。
（確か、こいつはもう使いものにならねえ。
といって捨てようとしたのを俺がパクったんだったな）
ま、どっちにしろ。使えないんだけどね。
さっきのヴェルジュを自分の隣に置き、他の武器の整理をし始める。

コンコン……

「あー、はいはい。

修史、出てくれないかー？ 今、手が離せないんだ」

『了解です』

快い返事が聞こえたと、同時に廊下の方へ向かっていく足音が聞こえる。

……よし、これで集中して銃の整備が出来る。

そう、現在、俺はいつも使っている拳銃の整備をしているのだ。

あのときに地面に落としてしまった銃の整備だ。

おかしいところがないかどうか入念にチェックしていく。

「隼人君!! この部屋の大きさはどういうこと!?!」
興奮した様子で俺に聞いてくる彩葉。

「……なに、興奮してんだ? 彩葉」

「この部屋の大きさが異常だからよ!!」

あー、やっぱりこれは大きすぎるよな。

さっき片付けてる最中にも新しい部屋を見つけたし。

「ああ、なんかスマン。ウチの母親のせいっぽい」

これまた片付けてる最中に見つけた物なのだが、
あの人が書いた手紙っぱいを見つけたからな。

「隼人君のお母さんって……」

呆れるかのように言い放つ彩葉。まあ、呆れるのも無理はないか。
こんなに息子にお金を使うとは思わないしな。

「……ホント、バカな母親だよ。欠陥魔導士ディヴァルチェの俺よりも、

エリートの“あいつ”にお金を使ったほうが良いに決まってるのに」

「隼人君……」

悲しそうな顔で彩葉は俺の名前を呟く。

「ま、もう、使ってしまったものはしかたない。遠慮無く使わせて
もらうけどな」

ははは、と笑いながら言う。

使ってしまったものを取り戻すことは出来ないからな。

「そうだよ……。それがいいよ。」

余計なことは何にも考えずに、ね」

「……だな」

二人して笑い合う。

……そうだな。

“あの家”にいるわけじゃないんだから。
もう、何も考えなくて良いんだ。

「こらー！ー！！柊！ー！ーっ！！」

姉さんに変なことしてないだろうな！！」

玄関の方から悠里が大声を出しながら走ってきた。

「誰がするか、バカ！！」

彩葉の言葉でだいぶ救われ、こいつの行動に感動していたのに。
邪魔をされたので、苛立ちを悠里にあてる。

……まあ、こいつのせいだから八つ当たりにはならないだろう。
冷静にそんなことを考えながら。

『ねえ、なんでこんなことになってるの？』

『ああ、アイリスさん。』

あのですね、彩葉が一人で先に来たんですよ。

それで隼人と仲良く笑っていたから、悠里が………』

『……もういいわ。なんとなく事情はわかったから』

「大体、こんな短い時間で出来るか、バーカ！！」

「……ってことは、する気だったんじゃないか！！」

「それは例え話で、する気はなかったっての！！」

大声で言い合う俺と悠里。

チラッと他の皆の方を見ると、俺達を見て笑いあっていた。

これを見てふと俺は思った。

それは――――

この光景がいつまでも続けばいいな。と俺は思う。



「学院長！！これはどういうことですか！！」

クラリア魔法学院、学院長室。

そこで学院長の机を強く叩き、大声で叫ぶ紅先生の姿があった。

紅先生の目の先には一人の女性……クラリア学院の学院長がいた。

「……………」

「なんで……何故、今年は一年生から

魔物退治に行かせないと駄目なんですか!!」

紅は机に文字が書かれている紙を強く叩きつける。

そこには、『今年は一年生から魔物退治に行かせるように』と書かれていた。

「……紅先生。

これは決定事項です。異論は認められません」

学院長らしき女性は、表情を変えることなく無表情のまま言い放つ。

「しかし……………」

「紅先生」

「……わかりました。失礼します」

残念そうに部屋を出てこうとする紅。

「……………」

その様子を学院長無言で見届ける。

バタンッ

「……これで良いのよ。そう、これで」

扉が閉まると同時に無表情を貫いていた学院長の表情が一変し、悲しそうな表情に変わっていく。

……この学院長の悲しそうな表情がどういう意味なのか。
知る者はただ一人、学院長自身しか知らない。

第9話 Just before a game (前書き)

遅くなってしまい、すみませんでしたm () m

学業のほうが安定しだったので、
そろそろ投稿を再開いたします。

でも、あれですね。

一ヶ月も更新をストップしてないというww

第9話 Just before a game

4月末。それは俺が転入してから2週間が経った日でもあるし、そしてこの前に紅先生が言っていた【学年混合チーム対抗戦】の日だ。

「……はあ、ついにこの日が来てしまったか」

ガックリと肩を落とし、ため息をつく俺こと柊 隼人。

現在、俺がいる場所は【学年混合チーム対抗戦】試合会場でもある訓練所だ。

イベントということもあってか、豪華な装飾だらけになっており原型すら残ってない。

そして俺の他にも参加者らしい人が沢山集まってきていた。

その中で、身近なやつはというと……

「なに、憂鬱になってんだ？」

――俺がこの学院に来て初めてあった女の子、水城彩葉の弟の水城悠里だ。

「そりゃあ、憂鬱にもなるさ」

気分やテンションがかなり落ちている状態の俺に悠里は話しかけてきた。

「俺の立場を考えてみる」

「……ああ、なるほどな。大体、わかった」

俺の問いに即答してくる。

ま、俺の立場って言ったら誰でもわかるか。

「そのクセ、紅先生に本気を出させたという情報が

他のクラスに回っていると……どうなるかわかるだろう？」

「……全員が全員、お前への警戒が強くなるということか。

もしかしたら全員で先にお前を潰しにいくと」

「そういうことだ……。はあ、ホントめんどくせつ」

まあ、強いやつと戦えるのは楽しみなんだが、

相手が多過ぎる無謀な戦いはしたくないんだよね。

「でも、お前なら大丈夫だろ？」

なんたって《最強の欠陥魔導士》なんだからさ」

「……なんだよ。その厨二くさい称号は」

「ふふん、良いだろ。オレと修史で考えたんだぜ」

お前らな……。人にそんな厨二くさい称号をつけんよ。

つか、広めたらぶち殺すぞ。

お前らだけで言うならまだ……許せるけど。

「……ま、いいや。自分で名乗らなければ良いだけなんだし。それよりも、まだあいつらは集まらねえのか？もう始まるんじゃないの？」

「なんか3人揃って、紅先生に呼ばれたらしいぞ」

ふーん、なんか問題でもあったのかね？

あいつらにあったのか、俺らにあるのかはわからねえけどな。

……いや、あるとすれば俺達か。あっちは天才組だし。

と、背伸びをしてリラックスしながら思う。

そんなことをして、時間が経つのを待っていると、前の事件の時に舞台の上にたっていた

黒髪妙齡の女性が、試合会場に向かって来た。

第9話 Just before a game (後書き)

ちなみにJust before a gameとは
試合直前という意味らしいです。

それと、友達がこちらのサイトで
歌ってみたを投稿したらしいです。

良かったら聞いてやってください。

←

http://www.nicovideo.jp/watch/
sm15850613

第10話 The worst first game

「おっ、そろそろ始まるな」

「そうだな」

さっき試験会場に来たばかりの女性は、マイクを持つところだった。

『ええ、これで参加者全員が揃いました。』

学年混合チーム対抗戦を始めます』

あれ、ちよつと待てよ。

これで全員が揃ったってどういうことだ？

まだ、彩葉に修史。そしてアイリスも来てないのに。

「ちよつと待ってください」

すぐに始めようとする女性に待ったをかける一人の男。

ネクタイの色を見る限り、俺達と同じ赤色なので一年生だろう。

その光景を見て、俺らのネクタイと色の違う生徒達は

やれやれ、またか……とため息をつく。

ちなみにネクタイの色は三つある。青・赤・緑だ。

これはどうでもいい話だが、青・赤・緑になった理由は、

蒼・紅・翠からきたんだっただけかな？ ホント、どうでもいい話だが…

…。

俺達一年が赤だから、青と緑のやつは二年か三年のどちらかだな。

雰囲気的に緑のほうが大人っぽいから三年かな？

「まだ、二人しか揃ってないんですけど」

どうやらあっちのほうも俺らと同じ状況らしい。

「俺らのところもです」

「私のところも」

それとキツカケに赤いネクタイをつけた生徒達がそんなことを言い出す。

だが、青のネクタイのやつらと

緑のネクタイのやつらが何も言わないところから、何かあるだろうな。

「何かあるな……」

隣の悠里も俺の意見と同じらしい。

「ああ、そうだな」

真剣な表情で学院長らしき女性を見つめる。

というか、こいつは絶対に学院長だろうな。

こんな学校行事……ここは学院だから学院行事かな？

ま、それはどうでもいいとして、

そんな大事な行事に学院長自ら出てこないなんておかしいしな。

「……………」

途中、隣から視線を感じたりしたが気にしないことにした。

『それに関しましては、こちらで説明します。』

ですが、少々お待ちください』

そういつてから、目の前に出現したモニターらしきものを弄る。

そして五分ぐらいすると、試験会場に設置されている大きなスクリーンモニターになにやら映像が映る。

そこに映った映像は……

生徒達が整列してる映像だった。
そしてその中には彩葉や修史、アイリスもいた。

『ああ、そちらの生徒達も聞こえますね。
……これより学年混合チーム対抗戦の説明をします』
その言葉を聞いた瞬間、俺の体が緊張のせいか硬直するのがわかった。

『まず初めにこちらにいる二名ずつでチームを組み、トーナメント戦を行います。』

そしてその結果を元に、上位10チームにポイントを渡します』

ああ、なるほどね。

コレだけで大体、わかったわ。

ってか、上位10チームってどんだけ多いんだよ。

まあ、一学年6つのクラスがあるから仕方ないっちゃあ仕方ないけど。

『そしてそれから三名ずつのトーナメントを行います。そしてその結果とさっき出た結果を合わせて、

一番ポイントが高かったチームの勝利ということです。わかりましたか？』

学院長の言葉に全員がはい。と元気良い返事をする。

『うん、いいお返事です。』

では、今から二名チームのトーナメントを行います』

学院長が指パッチンをする、

スクリーンモニターが変わり、トーナメント表になる。

『なお、順番はシャッフルになりますのでご了承ください。

シャッフル、スタート!!』

シャッフルスタート。

そう言った瞬間、トーナメント表に映った俺達の名札がバラバラに動き始める。

そして学院長の『ストーーーーーッブ!!』という掛け声と同時に動きを止める。

その瞬間、俺達の名札があった場所は……

「……マジ？」

「嘘でしょ？」

『おっと、これは最初っから期待出来そうですね』

一番左のところだった。

つまりは一回戦、一試合目。

別にそれは良いーのだが、一番良くないことがあった。

『なんということでしょう。

まさか一回戦から一年生が三年生に当たることになるとは……』

そう、三年生が一回戦の相手なのだ。

それだけならもしかしたらなんとかなるかも知れない。

そう思うことも出来るのだが、もう一つ嫌な出来事がある。

対戦相手の名前をさっき、見てみたのだが、

【ふじはら藤原 ともや智也 & ながせ永瀬 ちほ千穂】と書かれていた。

そしてそのうち、片方……藤原 智也の名前を入学前に見たことがある。

藤原 智也 クラリア魔法学院、生徒会執行部書記。

現在、この学院で会長の次に強いとされている人物だ。

「はぁ、これは一回戦負けかな。姉さん達に謝らないとな」
隣で悠里が暗いテンションで何かを呟いていた。

「……悠里、一つだけ勝つ方法はあるぜ」

コレは限りなく賭けに近い。

というか、俺が頑張らないといけない。

「どういう作戦だ？」

「おまえ、永瀬の方とタイマンで戦えるか？」

俺の言葉を聞いて、悠里は考える。

「もしかしたら出来るかも知れないが、それがどうかしたか？」

そうか、なら良い。

そういつてから作戦を考えるのをしめるかのようにある言葉を言う。

「……俺が藤原とタイマンで戦う」と。

第11話 The first game, a start

「……大丈夫でしょうか？」

隼人と悠里の対戦相手が決まった頃、
モニター越しに彼らの親友、修史は彼らの心配をしていた。

理由としては単純明快、対戦相手が自分達より年上の三年生だから、
というのと、その対戦相手の強さは学院2位だからである。

「悠里、隼人君……」

彼の隣では悠里の姉でもある彩葉も二人のことを心配していた。

「大丈夫よ」

そんな中、たった一人だけ心配していない人がいた。

アイリス・スカーレットだ。

「彼らを信じなさいよ。私達の仲間でしょ？」

彼女がそう聞くと、二人はまあ、そうだけど。と言う。

「だったら信じてあげなさい。」

それが今の私達に出来るたった一つの方法でしょう？」

アイリスが満面の笑みを浮かべながら言う。

それは見とれるのも仕方がない。

と全員が全員言うであろう。天使の微笑みのようだった。

「……そうですね」

納得したのか、修史はため息を一回ついてから表情を変える。
それはまるで、仲間を信じきっているかのような顔つきだった。

「それに……」

『ほら、あいつらだぜ?』

『ああ、あいつらが可哀想なやつらか』

『ホント、可哀想だよな。学院2位と戦うことになるなんて』
これで負けは決定だな。

そういつて笑いあう二年生の男達を見ながらアイリスは言う。

「あんなやつらを見返してやりたいのよ!!」

隼人、悠里——っ!! ぜったいに勝ちなさいよ——!!」

イラつきが限界に達したのか、モニターに向かって
おとなしい彼女にしてはらしくない大声をあげる。
その光景を見て、修史は思った。

（隼人、悠里。勝たないと死ぬことになるかもしれませんよ……）
と。



『では、両チーム、前に出てきてください』

司会者……学院長ではない女性がステージの中心辺りまで来て言うてくる。

それを聞いた俺達は一斉に中心地点まで歩き始める。

「……お前が柊 隼人だな」

俺達に向かって……特に俺を見ながら言うてくる藤原。ちなみにこっちで話してる間に司会者は、他のみんなを違う場所に連れていったりしていた。

「だったら、どうなんだ？」

「ふっ、話は早い。俺とタイマンで勝負しろ」

どうやってタイマンに持ち込むか。挑発でもするか。

そんなことを考えていたのだが、あちらさんからタイマンの申し込みがあったので、

作戦通りにいきそうだな。と思い嬉しさで少し口角が上がり上がる。しょう。

「別にやっても良いけど。なんでだ……」

「お前は《最強の欠陥魔導士》と名乗ってるらしいじゃないか」

「まあな」

名乗ってるのは俺じゃねえけど。

「最強という称号は、副会長しか使ってはいけないんだよ。だから、俺が勝って最強と名乗る権利を剥奪してやる」

「……………」

えっと話が支離滅裂すぎて良くわからないんだけど。

つまりこいつの言いたいことは、

俺が最強を名乗ってるのが許せないってことだな。

こいつの言う副会長しか名乗ってはいけない、と。

要するに、アレだな。

副会長バカですね。

言い方を変えるとゾッコン。

でも、一つ気になるんだが、

最強って生徒会長じゃなかったか？そう思った俺は悪くないだろう。

俺の聞いた話だと、この学校の会長が一番強いらしいけど。

……もしかしてこいつは、その副会長が好きなのか？

ふと、そんなことを思ってしまうが、勝負に必要なことだな。

そう思い、考えるのをやめるかのように首を横にふる。

「やれるもんならやってしろよ」

腰のベルトから拳銃を抜きながら言い放つ俺。

銃弾は既にこの大会仕様になっている。というか、くれない紅に渡された。

「上等だ。千穂っ！」

あいつには手を出すなよ。あいつは俺の獲物だ」

俺に真剣な眼差しを向けながら言ってくる。

既にやる気なのか、手に光が集まりヴェルジュ魔導器を作り出す。

武器の形は長剣なのか、長細い剣の形になっていた。

「はいはいっ、わかってるわよ。でも、喰わないようにね」

喰わないようにってどういうこと!?

もしかして、こいつってあっち方面の人なのか？

「……努力はする」

「まったくもう。」

これ以上、生徒会室に男連れ込むのはやめてよね」

……もう何も考えたくない。

というか、自身に起こりうる最悪な結末を一瞬でも考えてしまい。

背筋がゾクっとする。

駄目だ、絶対に勝たないと俺が危ない。

「……隼人、まあ頑張れ」

励ますかのように俺の肩に手を乗せながら悠里は言ってくる。

「頑張るけどさ。ーお前もその可能性があることわかってる？」
俺がそういうと悠里はキョトンとする。

アレ？なんかこいつの様子おかしくね？

「あ、ああ。そうだったな」

一瞬、自分の体を見回してから言う。

「わりい、なんかあいつのせいで頭ん中、訳わかんなくなってきた」
ああ、なるほどね。

だからさっき、あんなことになってたのか。

それは仕方ないけど。

「勝負はしつかりやれよ」

「ああ、それはわかってる」

それなら良い。

そう小さく呟いてから俺は、銃弾のチェックをする。

『両チーム、準備が出来たようなので始めます。』

Aチーム 水城悠里・柊隼人ペア対Bチーム 藤原智也・永瀬千穂』

両チーム、構え。

司会者にそう言われ、全員して武器を構える。

俺と藤原は既に構えていたのだが、

二人は構えてなかったので、瞬時に魔導器ヴェルジュを作り出す。

『レディー……………ファイトっ！！』

第12話 Conclusion

「はああああああーっ！！」

試合開始のサインと同時に俺は藤原に銃弾を放ちながら突っ込む。

「……ふっ、開始早々から突っ込んでくるのか。」

最強と言っているが、ただの猪だったようだな」

その銃弾をかわし、時に長剣で弾き返される。

「っ！？」

弾き返された弾が俺に向かって飛んでくる。

それを危機一髪の場所で避ける。

あつぶねえ、まさか跳ね返されるとは思わなかった。

「……さすがは学院2番、強いな。」

どうやってその強さを手にいれたんだ？藤原さん」

無理な横っ飛びをしてよけたせいか、少しだけ隙が出来る。

その隙を埋めようと、藤原に話しかけたのだが、

「隙ありだっ！！」

無視され攻められる。

「おいおい、少しは俺の言葉も聞いてください……よっ！！」

拳銃で長剣を受け止める。

「ふんっ、中々やるな」

受け止めた俺を凄いと思ったのか、自身が思った感想を言うてくる。

「だが、甘い」

急に力の入れ方を変えられたため、俺が持っていた拳銃を弾かれてしまう。

そして俺はその懐に入られた剣を咄嗟によけるため、後ろに飛んで引こうとしたのだが、

たまたま足元に落ちていた拳銃に躓き尻餅をついてしまう。

「しまっ……」

カランッ、拳銃が地面に落ちた音が響くと同時に俺の喉元に剣を突き立てられる。

「中々に良かったが、勝負ありだ」
勝った。

心からそう思ったからか、藤原の顔に余裕の笑みが生まれる。

「……それはどうかな」

さっき躓いた拳銃を足で蹴りあげ、落ちてきた拳銃をうまいこと手に持つ。

そして藤原目がけて構える。

「しまった!!」

のだが、最悪な事実を知ってしまう。

この拳銃……魔導器^{ヴェルジュ}じゃねえか！俺、使えねえじゃん。

ってか、なんでこんなところにヴェルジュが落ちてるんだよ。

ああ、もしかして悠里と戦ってるやつの武器か。

「どうした？ 撃たねえのか」

「……………」

「そういえば、ソレは千穂の武器か。」

「……なるほどな。撃ちたくても撃てないってわけか。」

「さすがは魔導士の欠陥品だな」

「……………」

「一度は焦ったが、これで終わりだな」

「余裕の表情を再度、浮かべながら藤原は剣を構える。」

「だーかーら、まだ終わってねえつつってんだろ!!」

「ふんっ、負け犬の遠吠えか」

「ぜってえ、後で殺す。」

「ムカつくような言い方で負け犬と言われ、そう心に誓う俺。」

「隼人っ!!」

「ったく、遅いんだよ。お前は」

「俺の名前を叫びながら、」

「ダッシュでこちらに向かってきたのは悠里だった。」

「すまん、ちょっと相手が強かったからさ」

「ふーん、あいつって意外と強かったんだ。」

「……千穂はどうした？」

「ああ、あいつならあっちで倒れてるぞ。ま、気絶してるだけだ
けど」

「ふと悠里が指さした方向を見ると、地面に倒れてる女がいた。」

「さて、これで形勢逆転だな。

どうする？棄権するか？それとも一か八かで二人相手に挑むか」

悠里から拳銃を受け取り、銃口を向けながら問う。

挑むと言った場合、すぐに撃てるようにするためだ。

「……まったく、だから気をつけると言ったのに」

ため息をつきながら藤原はそう呟く。

「この勝負、俺達の負けだ」

そういった後、藤原が持っていた武器が光の粒子になって消えていく。

「よっしゃあー！ー！！」

「……ホントに勝っちゃったよ。オレ達」

対戦相手の藤原が武器を放棄し、棄権したことによって俺達の勝利が決まる。

それを頭の中で認識したのち、俺達は勝利の喜びをわかしあっていた。

「悠里」

手をグーにし、黙って手を悠里に向かって突き出す。

それだけで意味はわかったのか、悠里は俺の手に自分の手を当て言った。

「ああ、やったな」と。

口ではあまり喜んでいなかったが、実をいうとかなり喜んでいる。その証拠に俺達の口角が上がりっぱなしだ。

『なんということでしょう！！奇跡が起きました。』

優勝候補の一つであった藤原智也・永瀬千穂ペアを破ったのは、
水城悠里・柊隼人ペアだ!!』

第13話 T r a n s i t o r y l o v e

「……なあ、俺達、勝ったんだよな？」

「ああ、勝ったな」

あの試合を終えた後、俺達は控え室に戻って休もうと思い、控え室まで戻っていたのだが、どうにも休めそうになかった。

というのも、

「柊君、どうやってあんなに強くなったの？」

「学院2位の藤原君に勝つなんて凄いね！！」

「いつからそんなに強くなったんだ？」

「……柊君、彼女いる？」

「柊ー！！俺だー！！結婚してくれー！！」

控え室にて質問ぜめにあっていたからだ。

ってか、最後のやつ。

ふざけんじゃねえよ、俺は男に恋する趣味はねえんだ！！



「うわっ、何この人混み……」

隼人のやつが質問攻めにあってる最中、姉さん達がこちらの控え室に来た。

「あ、姉さん。学院2位のやつに勝ったよ。

これでウチの優勝に一步近づくね」

「あ、うん。そうだね」

姉さんは隼人のことが気が気で仕方ないのか、妙にそわそわしていた。

……ホント、なんであんなやつに惹かれてるんだか。極普通の男じゃないか。

まあ、オレより強いということは認めてやるけどさ。

さっきだってあいつがいなければ正直、勝てなかった。

あいつが藤原を相手に善戦をしなかったら……惨敗だった。

オレがしたことなんか、あいつより弱い永瀬と戦っただけだ。

それでも3年生だから強かったが、

藤原のやつと比べれば永瀬には悪いが、天と地ほどの差がある。

そんな永瀬に勝つのに時間もかかった。

……あいつが永瀬と戦ったら、もっと早くに終わったのかな。

……強くなりたいな。

隣で隼人のことをずっと見てる姉さんの姿を見ながらオレはそう思う。

強くなって、姉さんを護りたい。

色んな障害や、敵――それから家の柵からも。

「あれ、隼人はどうしたんですか？悠里」

姉さんが来た数分後に修史とアイリスの二人がやってきた。手にはそれぞれ二人分のジュースを持っていた。

「ああ、あいつならあっちで質問攻めにあってるよ」

人混みのほうを指さすと、修史は苦笑の表情を浮かべる。

「……ああ、やっぱりこうなっちゃってましたか」

「やっぱりってどういうことだ？」

「いえ、普通に考えてみてください。」

いきなり新入生が3年生を倒してみてくださいよ。そりゃあこんなことになりますよ」

「……確かに」

良く考えると、そうだな。

しかも隼人は欠陥魔導士こいつときたものだ。ディヴァルチエ

それなのになんで学院2位に勝てるんだよ？となるな。

そりゃあ、こんなことになっても仕方ないな。

「あ、はい。これどうぞ……悠里さん」

アイリスが手に持っていた缶ジュースを渡してきた。

ちなみに持っていた缶ジュースは、オレンジジュースだった。

「ありがとう」

これを選んだのは、絶対に修史だな。
そんなことを心の中で思いながら受け取り、飲み始める。

「それにしても彩葉も、自覚すれば良いんですけどね」
そう呟く修史の表情は、あたかも彩葉の兄らしい顔つきだった。

「……なんでお前は、そんな顔してるんだよ」

「はい？どんな顔ですか？」

「何ていうか、こう……妹の旅立ちを見守る兄みたいな」

オレがそういうと、修史はいきなりの言葉に顔をキョトンとさせる。

「そんな顔してましたか？僕」

「ああ、してたぜ」

「してたわね」

オレとアイリスの肯定の言葉を聞き、修史は笑い出す。

「ま、それも仕方ないでしょうね。」

彩葉が隼人のことが好きなんでしょ？アレはどう考えても」

「……そうだな」

あの行動は好きな人相手にしか出来ないはずだし。

「で、僕は考えたわけですよ。

彩葉の恋は全力で応援するって……」

そう言い聞かせるように宣言する修史の顔は、とても悲しそうだった。

「……お前はそれで良いのか？」

「はい？何のことですか」

「恍けるなよ。お前が昔、姉さんのことが好きだったのは知ってる

んだ。

「だけど、その好きな人を隼人あいつに取られたんだぞ？」

「ええ、まあ、考えようによっちゃあそうなりますね」

「だったら……」

「でも、僕は彼らを応援しますよ」

再び、応援すると宣言する修史。

「なんでだよ……」

しがらみ ヴァルチェ

「色んな柵のある魔導士ヴァルチェの僕だったら彼女を護れない。

「だけど、柵のない欠陥魔導士ディヴァルチェの彼だったら彩葉を護りきれはるはずだから」

「ま、隼人が欠陥魔導士じゃなくても彩葉を任せることは出来たでしょうけどね。」

と、付け加えるように言うてくる。

……ホント、なんでそんなに簡単に諦められるんだよ。

第14話 Back room person

隼人が質問攻めにあっていた同時刻。

対戦相手だった藤原智也と永瀬千穂の二人は屋上に来ていた。

だが、永瀬の表情はいつも以上に暗かった。

「……ごめん。私が負けちゃったから」

「良いって言ってるんだろ。」

「ってか、元から負けろって言われてたし」

あっけらかんとして言い放つ藤原。

「へっ？　なんで？」

その言葉を聞いて、驚く永瀬。

彼女自身、何も聞いていなかったのか、本当に驚いていた。

「……そこにいるんだろ、会長。」

そろそろ説明してくれないかな？俺達に負けろって言った理由を」

何もない場所に話しかける藤原。

だが、その刹那――空間に歪な穴が開き、中から女の子が出てくる。

「良くわかったわね。私がここにいること……」

そういう放った彼女は、

学院1位兼生徒会長の【御神^{みかみ} 雪菜^{ゆきな}】だった。

「勘だ。……で、俺達に負けろって言った理由は何でなんだ？」

「……政府からの命令よ」

「政府からだと!？」

「ええ、あの政府からの命令」

「――あいつら、次は何を企んでやる」

藤原自身、政府には恨みがあるのか顔に嫌悪感がかなり出ていた。

「……何を狙っているのかは、なんとなくわかるけどね」

「なんだ!？ あいつらは何を狙ってやるんだ? 教えてくれ」

狙いがわかると言った会長こと御神に言う藤原。

「あいつらの狙いは――――よ」

御神の予想を聞いた藤原と永瀬の二人の表情が凍りつく。

「……嘘でしょ？」

「千穂、これは本当の話だ……」

信じようとしないう永瀬に藤原は言い切る。

「なんで、あの子が狙われないといけないのよ!!」

あいつらとの接点なんて……」

今にも泣き崩れそうな永瀬。

「ない。だが、政府の狙いは変わらないんだろ?」

そんな様子の永瀬を抱きしめ、藤原は御神と話す。

「ええ、そうよ」

「そうか……」

なら、俺達が頑張ってあいつを護らねえとな」

俺達が護ってやるから死ぬんじゃないぞ。―――。

第15話 Rest time

「……はあ、疲れた」

「あ、隼人君。大丈夫？」

悪魔の質問攻めの時間を終え、生還してきた俺を暖かく迎えてくれたのは彩葉だった。――ホント、彩葉は優しい子だよ。

「大丈夫っちゃあ大丈夫だけど。」

シンドイちゃあシンドイっていう……なんていうか訳がわからない体調だ」

「……水、あるけど飲む？」

手に持っていたボトルを渡してくる。

「お、サンキュー。」

ちょうど喉が乾いてたんだ。ありがたくもらうよ」

彩葉が持っていたボトルを出来るだけ優しく取り、そしてすぐさま水を飲み始める。

「ぷはあ、何これ超うめえ!!」

この水、今まで飲んだ水より遥かに美味いんですけど。

「ほっ、美味しかったんだ。良かったあ」

よかったってどういう意味だ？

これって水呑場の水とか、自動販売機で売ってる水とかじゃねえのか？

「……コレ、どこで買ったんだ？」
ふと気になって口に出した言葉。

その質問の答えは、俺の考えを遥かに超えていた。

「え、買ってませんよ」

「へっ？」

買ってないんだったら、どうしたんだ？

「その水は私の魔法で出したんですよ。言ってませんでしたっけ？
水城の家柄の人達は水属性のエキスパートだって」

「そんなの一回も聞いてねえぞ」

「あれ、言いませんでしたっけ？」

言ってねえよ！！つか、そういうのは早く言え。

そう心の中で思った俺は、悪くないだろう。

「あ、ちなみに修史君は火属性のエキスパートね。

それで確か、アイリスちゃんは氷属性のエキスパートだったかな？」
いや、だからと言ってそんな情報は知らないんだけど。

「……って、あれ？悠里は何のエキスパートなんだ？」

さっき名前が出なかった悠里は何のエキスパートなのか、
気になった俺は彩葉に聞いてみる。

だけど、ソレは聞いてはいけない事だったのだろう。

彩葉の表情が一気に暗いものへと変わっていった。

「あ、わりい。聞いてはいけない事もあるよな」

「ううん、聞いてはいけない話ってわけじゃないの。ただ今は言い

にくだだけで……」

そうか……。と、彩葉の言葉にそう答える。

「お前らが話したいと思ったときに聞くことにするよ」

別に言いたくないのなら、無理して言わなくてもいいしな。

「……ありがとう」

「気にすんな」

短くそういつて笑顔を見せる彩葉に俺も笑顔を返しながら言う。

「あーっ！！ 隼人、テメエ。」

何、姉さんを口説いてんだよ！！」

「だから、こんな短時間で口説けるわけねえだろ！！」

なんかこの台詞は前にも言った気が……あれ、デジャヴじゃね？

さっき言った言葉にデジャヴを感じながら、全力でツツコム。

「短時間じゃなかったら、口説いてたのか！？」

「ああ！！もう、揚げ足ばっかかってんじゃねえよ！！」

頭を掻きながら半場、叫ぶ。

ホント、こいつは揚げ足をとりすぎなんだよ。

『これで一回戦全ての戦闘が終わりました。これより二回戦を始めます』

悠里と口喧嘩をしていると、控え室全体に放送が響きわたる。

「……もう、試合の時間か」

ため息をつき、残念な気持ちになりながら言う。

理由は一つ、これからの試合のことを考えたからだ。

さっきの戦いでこのペアで一番脅威と思われてるのは、おそらく俺だろう。

そうなる俺が集中攻撃を受けることになる。

つまりはアレだ……敵の集中攻撃を喰らって、

俺の集中力と精神力がゴッソリと削られていくというわけだ。

「隼人、これからは気を抜いていいからな。

ほとんどオレが倒していくから……」

「ああ、任せた」

手を差し出すと悠里は、俺の手を確かに握った。

俺を嫌っていたあの頃と比べると、かなりの進歩だな。

それなりに俺も信頼されかけた、というわけかな？

「その代わり、最終戦は任せたぜ」

悠里の言葉がふと気になり、悠里の手を離してから控え室につけられたモニターを見る。

えっと……、最終戦で当たりそうなのはー！。

「……………」

一番、最後のところに書かれていた名前を見てぞっとする。

「マジ……？」

「ああ、マジだ」

俺の視線の先には、【御神^{みかみ} 雪菜^{ゆきな}・加賀美^{かがみ} 鏡花^{きょうか}】という名前があった。

御神 雪菜。

この学院の生徒会長。そしてこの学院最強でもある。

「……まあ、やってやる。

その代わり、決勝戦までの戦いにあまり参加しないからな」

「ああ、わかってるさ。決勝戦は任せたぜ」
任せた。

その言葉と同時に手を高く挙げられる。

「任せろ」

そういつて悠里の手を強く叩く。いわゆるハイタッチってやつだ。

ここまできたらぜってえ、勝ってやる。

そんな決意をしながら俺達は、控え室を後にする。

第16話 2 times game

「はああああーっ！！」

「きゃっ!？」

悠里が対戦相手の武器を弾き飛ばし、喉元へ剣先を向ける。

その行動に驚いた対戦相手の女の子は、尻餅をつき短く悲鳴をあげる。

「……オレの勝ちね」

満面の笑みでいう悠里に対し、対戦相手の女の子は、

「参りました／＼」

頬を赤くして、そういうのであった。

『勝者 水城悠里・柊隼人ペア』

会場が歓声の声で一杯になり、全体に響きわたる。

こうなった理由は、一回戦と同じように相手が2年生だったからだ。

歓声の中、悠里は会場の一角へ向かう。

そこには何もない場所だ。

だが、悠里が手をひと振りすると、その一角に歪な空間が出来る。

そしてその中から、眠っている隼人が出てきた。

そんな隼人の様子に呆れ、頭に手をあてため息をつく。

「隼人、終わったぞ」

「……ふわぁ、終わったのか」

悠里が声をかけたためか、隼人は背伸びをしながら起きる。



「ああ、終わったぞ。

一人だったから手間はかかったが決勝戦の相手ほど、手間ではないだろう」

あの人は無茶苦茶、手間がかかりそうだな。

学院最強兼生徒会長の御神 雪菜は。と心の中で俺は思う。

特別席らしい高所から俺達を見下ろしてる会長を見る。

その瞬間、驚くべきことに気づく。

……あいつ、なんで俺ばかり見てやがるんだ？

俺が会長の方を見た瞬間からずっと、目が合ってた。

つまり奴は、ずっと俺の方を見ていたということになる。

『では、次の対戦は……』

司会がそういったとき、ちょっとした事件が起こる。

司会の隣に座っていた生徒会長様が、

椅子から立ち上がり、目の前にあるフェンスに乗ったのだ。

『なっ！？ 会長、何をしてるんですか？』

これには司会の人もビックリ。
かなり焦っていた。

「……あいつ、何をする気だ？」

隣の悠里も警戒を解かない。その理由はすぐにわかる。

何故なら――

「……………」

あいつの視線が俺から外れることがなかったからだ。

それにより、俺の警戒レベルも高まっていく。

その証拠に顔はさっきまでと違い、

表情は硬くなり、そして真剣な顔つきに変わっていくのが自分でもわかる。

『……………行くぞ』

会長の手に光の粒子が集まった瞬間、

ここからではあまりわからないが、そういった気がした。

――直後、会長はそこから飛び降り、俺に向かって一直線に落ちてくる。

落ちてくる間に光の粒子は、武器を生成していく。

「……………」

生成された武器は、いかにもゲームの主人公が持ってそうな真っ白な剣だった。

装飾がともカッコイイのが、見てわかる。

……この状況だけみると、俺が悪役みたいだな。
呑気にそんなことを思いながら、

俺は会長が真っ逆さまに落ちてきているのを見る。

会長は剣を構えながら俺に向かって直進してきていた。

「はぁ……、ホント、今日は最悪な一日になりそうだぜ」
標的にされまくるという意味で。

あ、あと、会長にも決勝戦で狙われまくるんだろうな。

「悠里、手を出すんじゃないぞ」

「ああ、わかってるさ。行ってこい」

俺の言葉を聞いて、悠里は会場の端っこのほうまで向かう。
俺達の戦いがどれだけ激しくなるかわからないからか、
流れ弾を避けるためかは俺にはわからないけどな。

ガキンッ！！

悠里が端っこに行ったと同時に、
金属と金属が勢い良く当たる音が響きわたる。

「いってえ……。やっぱ高所からの方が威力があるのか」

今度から守るときは、よけることにしよう。
攻撃するときは高所から襲撃するけどな。
高所からの攻撃を受けてそう心に誓う。

「ふっ、はあっ!!」

地面に着地したあと、何回も剣を振ってくる。
それを拳銃で受け止め、時に隙をつき近距離射撃する。

だが、銃弾は超至近距離で撃ったにも関わらず、一撃も当たらない。

「……さて、俺を狙ってくるっつーことは、
俺に怨みがあるってことでもいいのか？」

拳銃と剣、つば競り合いになった瞬間をつき、俺は会長に質問する。
一番、気になっていた質問を、だ。

「――さあね。

知りたいなら自分で調べなさい」

『御神さん、何をしてるんですか!?!』

司会の人から注意を促され、会長は剣を降ろし会場から出ていく。
会場から出た理由は、さっきまでいた場所に戻るためだろうな。

――それにしても、なんてあいつは俺を狙ってくるんだよ。
理由がわかんねえ。

あいつの怨みを買うような行動はしたことねえし、昔に会ったとい
う記憶もねえ。

『自分で調べなさい』

調べなさいと言うってことは、
もしかして、俺が誰かに狙われてるのか？

「……まさか、な」

「隼人、どうした？」

「いや、何でもない。さっさと戻ろうぜ」
話をきってから、俺は会場から出ていく。

「お、おう……」

戸惑った感じで悠里もあとを追って出てくる。
が、俺はそんなことを気にしている余裕がなかった。

調べるなんて言っても、調べる手段がない。
つまり決勝戦であいつから聞き出す必要がある。
ということは、決勝戦まで確実に進まなくてはいけない。つーこと
だ。

「……はあ、先はながいな」

第17話 S e m i f i n a l

俺達は無事に準決勝まで勝ち進むことが出来た。

だが、それと同時に悠里一人で

勝つのが苦しくなってきたため、俺も戦いに参加していた。

「……ふっ」

敵の武器……槍のようなモノを舞うようによける。

「このっ、当たりやがれ!!」

何回も突いてきたり、薙ぎ払ってくる。

のだけど、全て俺に当たることはなかった。

(ーまっ、俺がよけてるからなんだけどな)

「無駄無駄っ、そんな攻撃じゃ当たらねえよ。」

攻撃っていうのは、……こうしなくちゃ」

一薙ぎした直後に出来た隙をつき、銃口を敵に向ける。

「しまった……」

「喰らえっ!!」

マガジンに入っている弾、全部撃ちきるつもりで連続して撃つ。

「ふっ、はっ……ぐっ」

最初の一二発は、槍で弾くことが出来たのだが、四発ぐらい被弾する。

ま、痛いだろうが、死ぬことはないから大丈夫だろ。

「……はあはあ、はあはあ」

槍を地面に突き立て、ソレを杖変わりに対戦相手の男は立ち上がる。

「はぁ、まだ立ち上がるのかよ」

（アレ、なんか俺の方が悪役っぽくね？）

そんなことを思いながら、相手に近づいていく。

「ふっ……当たり前だ。あの会長と五角に戦えるお前だ。

何も作戦を用意してなかったと思うのか？」

対俺達用の作戦がある。

そう言い放ってくる男を疑うような目で見る。

（やっぱ、そうなるよな。だけど、そんな素振り一回も……）

俺に何もしてこない。

だけど、ペアとして戦っている悠里は……？

『ぐあっ……』

俺の直感が当たった瞬間。

悠里の痛みに苦しむ声が聞こえた。

「悠里っ！！」

見てみると、女の髪の毛が悠里の首を締めていた。

（ちよっと待てよ。そんなことしたら試合に関係なく死ぬぞ！？）

……悠里の苦しむ声を聞いた途端、会場も騒がしくなる。

そして試合会場全域に結界が貼られる。

（……おいおい、これはさすがにおかしい）

「ははは、やった。作戦は成功した。これで勝ったぞー！！！」

いきなり笑い出す男に向けて、俺は発泡する。

出来るだけ重症を負わせるつもりはなかったんだが、

いきなり笑いだしたのが、ムカついた。……ただ、それだけの理由で、だ。

「……くそっ、どうにか持ちこたえろよ!!」

男の意識が失ったことを確認し、悠里のところへ急ぐ。

(……だから言ったのによ。俺が女の相手をするって)



隼人が男と戦っている同時刻。

悠里ももう一人の対戦相手と戦っていた。

「本当にあなたが私の相手でいいのかしら？」

「ああ、見るからにお前の方が強そうだからな」
剣を構えながらオレ達は話していた。

だが、オレ達二人とも顔は真剣だった。

(隙を見せればやられる)

そう思っていたからだった。

相手の女がどう思ってるかは、知らないけどな。

「それじゃ、行くわよ」

「……こいつ!!」

真っ黒な剣を持って突っ込んでくる女。

それに対し、オレは剣を真正面に構えるだけで身動きはしなかった。

（隼人、お前の言ってたこと……信じるぞ）

この女と戦う直前、オレは隼人からアドバイスを受けていた。

『いいか。悠里、お前の剣術にはあるものがかけてる気がするんだ』

『あるもの?』

『ああ、と言っても、

剣はあまり使わない俺の戯言だけだな。多分、当たってるはずだ』

『なら、教えてくれ。』

オレの剣技に何が足りないんだ?』

『おそらく………』

「はあああああっ!!」

剣を持って突っ込んでくる女を冷静に見つめる。

すると今まで見えてこなかったモノが見えた気がした。

「っ!!」

焦ることなく、女の攻撃をよける。

「……隼人。お前の言ってた事、本当だったらしい」

あいつが言ってくれたアドバイスが

本当の事だったことに気づいたオレは自嘲気味に笑いながら言う。

（最初から、あいつはこういうところを見てたんだな。

初めてオレと会ったとき、戦っていたときも……)

「……なら、あいつのためにも勝たねえとな!!」フレイムプレス【焰の龍息】」

技名を唱えたと直後、地面から生まれた炎の渦が剣に纏っていく。
これがオレの得意技の一つ、フレイムプレス【焰の龍息】。

『なっ、属性魔法を使えるの!?!』

女が何か言ってた気がするが、気にしない。

「喰らええええっ!!!!」

剣を女の方へ向かって振りかぶる。

その動作だけで、剣から炎の渦が龍の様に敵に向かっていった。
そしてソレが女を巻き込んだとき、爆発する。

炎の残骸が会場のあちらこちらに残っている。

そんな中、女は地面に倒れ付していた。

「……ふう、終わったか?」

死んではないと思うが、倒れ付したままの女を見て呟く。

だがピクリとも動かなやつを見て、意識を失ってるか。

そう思いオレは隼人の方へ行こうとした時だった。

「ぐうっ!?!」

首に何かが巻きついていていた。

痛みを堪えながら、見てみると髪の毛のようだ。

(……何だよこれ)

内心、驚きながら髪の毛の先を見る。
すると驚くべきことに、髪の毛の先にいたのは倒れ付していた女だった。

「残念だったわね♪」

「……テメエ。意識を失ったんじゃない？……ぐあっ!？」

首に巻きついてた髪の毛が深く首にしまっていく。

あ、やべえ。意識が無くなってきた。

……オレ、このまま死ぬのかな？

そんなことを思っていたとき、ある言葉が聞こえてきた。

「……これで邪魔者がいなくなる。」

柊隼人の殺害も案外、早くに達成出来そうね」

女の声だった。それと同時に思ったことがある。

おそらく姉さんのために

自分の体を犠牲に出来た隼人のことだから、オレを助けにくるだろう。

だが、それがあの女の陰謀だったとしたら？

「悠里っ!!」

ふと声のした方向を見ると、

銃を持った隼人がこっちに向かっていた事に気づいた。

(……ダメだ。こっちに来たら。

お前が死んだら姉さんが悲しむんだ!!

だから、こっちに来るんじゃない？（

「……………」

こっちに来るな。

そう言いたいのに、思ったように口が動かない。

オレの命はどうなっても良いから。

^{あいつ}隼人の命だけは助けてやってくれよ。

あいつが死んだら、姉さんが悲しむんだよ。
だから頼むよ。あいつを助けてやってくれ。

そんなことを思いながら、オレは意識を失った。

第18話 A t t a c k p e r s o n

「……テメエ、どういふつもりだよ。

こんなことしてタダで済むと思ってんのか!？」

「無論、タダで済むとは……あらっ? 死んじやったかしら?」
女は悠里を目の前に持ってきて、じつくりと観察する。

「やっぱ人間はダメね。簡単に死んじやうわ」
人間はダメ。

自分は人間ではない。

そんなふうに言い放つ女に俺は怪訝そうな表情を浮かべる。

「……ま、目標が自ら来てくれたことだし、この子是用済みだけど
ね」

そういつて悠里を地面に放り投げる。

「悠里っ!？」

放り投げられた悠里の場所まで急いで向かい、
スライディングをしながら悠里をキャッチする。

「……悠里、しっかりしろ!! おい、聞いてんのか!？」

「無駄よ。その子は死んでるわ」

死んだ。

悠里が死んだ……?

そう言い放つ女を睨みつける。

悠里を一旦、会場への入口付近の安全な場所へ連れていき、
その壁に背をあずけるように寝かせておく。
……ここなら、今はある結界が無くなれば誰かが助けしてくれるだろう。
本当なら今すぐにでも、悠里を医者に見せたいんだけど、このまま
じゃ無理だ。
だったら、結界を貼った犯人を殺さねえと。

だから、それまで死ぬんじゃないよ。



「あらっ、悲しみの別れはこれぐらいで良いのかしら？」
「……………」

おそらく俺の直感だが、結界を貼ったのはこいつだろう。
さっきからの言動と、悠里を殺そうとしたその態度でわかる。
「殺すっ！！」

腰につけているベルトから、実弾入りの拳銃を抜き取り構える。

「……はあああああああつ！！」

敵に標準を合わせて撃ってるのだが、一発も当たる……掠ることもなかった。

「チッ……なら、これならどうだ!!」

拳銃をベルトに直す。

そしてブレザーのボタンを外し、中からマシンガンを二丁取り出す。

「へえ、そんな物騒なモノまで持ってるのね。

どうやって手に入れたの?」

「……誰が好き好んでお前に教えるか!!」

敵に向かって突っ込む。

もちろん、走りながらずっと銃は撃つ。

……ホントに時間がねえ。早くしないと悠里が――。

グサツ

「ぐはっ……」

いきなり血反吐を吐く俺。

はっ?なんで俺は急に血を吐いてんだ。

そう思ったとき、ふと腹に異変があるのがわかった。

「……………」

ゆっくりと頭を動かして、その場所を見ると、

髪の毛のようなものが俺の腹を突き刺しているのがわかった。

髪の毛のその先には、ニヤリと笑いながら俺をじっと見つめてるあの女の姿があった。

「……この、クソやろうが」

そう呟いた直後、女は俺から髪の毛を抜く。
それと同時に傷口から、大量の血が吹き出す。

「……………」

血を吹き出した後、俺の体は地面にドサッと倒れる。

「教えてあげましょうか？」

あなたが必死になって護ろうとしていた子を殺した理由」
そんな地面に倒れてる俺に向かって、女が言う。

「本当の目標はあなただったわ。

だけど、物事を冷静に対処できる能力が邪魔だった。

……なら、あなたの仲間を殺せばと思ったわけよ」

つまり、最初からこいつらの狙いは俺ってことか。

なんで、標的が俺なんだよ。

なんで、そんなくだらない理由で悠里が殺されなくちゃいけないんだよ。

なんで、俺に仲間を守る力がねえんだよ。

「これで、終わりね」

そういつて髪の毛を俺の体全身に飛ばしてくる。

……悠里、絶対に生きててくれよ。

そんな思いを持ちながら、俺はゆっくりと目を瞑る。

「さようなら……」

第19話 The hand of help, and a conclusion

「……誰が好き好んでお前に教えるか!!」

敵に向かって突っ込む。

もちろん、走りながらずっと銃は撃つ。

……ホントに時間がねえ。早くしないと悠里が――。

グサッ

「ぐはっ……」

いきなり血反吐を吐く俺。

はっ?なんで俺は急に血を吐いてんだ。

そう思ったとき、ふと腹に異変があるのがわかった。

「……………」

ゆっくりと頭を動かして、その場所を見ると、

髪の毛のようなものが俺の腹を突き刺しているのがわかった。

髪の毛のその先には、ニヤリと笑いながら

俺をじっと見つめてるあの女の姿があった。

「……この、クソやろうが」

そう呟いた直後、女は俺から髪の毛を抜く。

それと同時に傷口から、大量の血が吹き出す。

「……………」

血を吹き出した後、俺の体は地面にドサッと倒れる。

「教えてあげましょうか？」

あなたが必死になって護ろうとしていた子を殺した理由」
そんな地面に倒れてる俺に向かって、女が言う。

「本当の目標はあなただったわ。」

だけど、物事を冷静に対処できる能力が邪魔だった。

……なら、あなたの仲間を殺せばと思ったわけよ」

つまり、最初からこいつらの狙いは俺ってことか。

なんで、標的が俺なんだよ。

なんで、そんなくだらない理由で悠里が殺されなくちゃいけないんだよ。

なんで、俺に仲間を守れる力がねえんだよ。

「これで、終わりね」

そういつて髪の毛を俺の体全身に飛ばしてくる。

……悠里、絶対に生きてくれよ。

そんな思いを持ちながら、俺はゆっくりと目を瞑る。

「さようなら……………」



……アレ、痛みがない？ ということだ？

ふと目を開けてみる。

すると――目の前に細長い剣を持った男と、拳銃を持った女がいた。

「助けにきたぞ」

「……ごめんね。遅れて」

それは、一回戦のときに戦った藤原智也と永瀬千穂だった。

「……お前ら、なんで」

「何でって、それがあのクソ忌々しい会長の頼みだったからだ」

「私達は会長からあなたが狙われてることを知った。

だから用心はしてたんだけど、遅くなっちゃった。ごめん」

あの会長が……？

つまり、さっき俺を狙ってきたのは俺の力を試すため？

それで頼りなかったから、こいつらを呼んだのか。

「そんなことは今はどうだって良い。

お前らが入ってきたってことは、結界はもうないんだろ？

悠里を、俺よりさきに悠里を医者に……」

続きを言おうとした俺の口に永瀬が指を当てる。

「大丈夫、悠里ちゃんなら既に医者に連れていったよ。

だから、この場所にいるのは私達とあなただけ」

良かった。ふっと肩をなでおろす俺。

「つたく、ちつとも状況は良くねえよ。

手が足りないんだよ。千穂、そいつにアレを渡せ」

なんだ？俺に渡すものでもあるのか。

「でも、あれを使うにしても、今の柊君じゃ倒れちゃうよ」

「いいから渡せ」

「あーあ、もう。わかったわよ。渡せばいいんでしょ!!」

半場、叫びながら俺に渡してきたのはひと振りの剣だった。

「……剣？」

「ええ、これは開発中の欠陥魔導士用の魔導器です。ディヴァルチエ ヴェルジュ

あ、ちなみに学院長が率先して開発してるみたいです。

つまり学院長があなた専用……と」

これを学院長が俺に……。

「ただ実験も何もしてないので、副作用があるかも知れません」
……なるほどな。

だから永瀬は俺にこれを使わせなくなかったわけか。

でも、俺にはやらないといけないことがあるんだ。

「サンキュー、ありがたく使わせてもらう」

剣を強く握り締める。

すると、体の奥深くからナニカが湧き出してくるのがわかった。

俺は悠里を、修史を、アイリスを、彩葉を……仲間を護りたい。

護りたいんだ！！

「はああああああー……っ！！！！！」

俺の体全体を纏うかのように、白銀のナニカが渦巻いている。

「……何この魔力！？私達とケタが違いすぎる」

これが魔力なのか？

そうか、魔導士ヴァルチエの魔力を使う気分ってこんな感じなんだな。

呑気にそんなことを考える。

さてと、そろそろ決着をつけますか。

「……藤原、こいつは俺の獲物だ。手を出すなよ」

「ああ、わかってるが。」

せめて“さん”をつけろ。“さん”を」

藤原が何かを言っているが、全て無視する。

「……行くぞ」

剣を持って全力で敵に突っ込んでいく。

「はああああーっ!!」

「……まさか、あの方はこの魔力を恐れて。」

なら、お前はここで殺さなければ」

女は髪の毛を何回も、何回も伸ばして俺に向かわせてくる。

それをよけたり、時には切ったりする。

のだが髪の毛の量が多いし、

それに疲れも溜まっていたため、喰らいそうになってしまう。

「しまった!？」

喰らう、そう思ったときー

「……今回だけは、お前を助けてやる」

藤原が俺が喰らいそうな髪の毛だけを攻撃して切る。

「……やつの弱点はおそらく腹の辺りにある宝石だ」

「ああ、なんとなくはわかった。

つーか、それしか怪しいのがねえよ」

「そうか……、なら、決めてこい」

「おう。それじゃ行ってくる」

藤原が近くまで迫ってきていた髪の毛を全部、

切り裂いたと同時に一気に敵まで突っ走る。

「これで最後だっ!!」

敵を一閃。

さっきまで苦戦していた敵は呆気なく苦しむ声を出すことなく終わった。

あまりの呆気なさに呆然としていると、パキッという音が聞こえた。

音の在処を見ると、武器にヒビが入っているのが分かった。

「……ほぼ一撃の衝撃ぐらいで折れるのか。

これは学院長に報告しておかないとな」

「そうだな。それじゃよろしくたの……」

よろしく頼む。そういつて剣を返そうとしたのだが、俺の意識がドンドンとなくなっていくのがわかる。

……あ、やべえ。そろそろ限界かも。



「柊君！？ねえ、大丈夫！？」

いきなり倒れた隼人に詰め寄って、抱きかかえる永瀬千穂。
そのとき見た彼の顔は、

目的を成し遂げ喜んでいる少年のような顔だった。

「……千穂、大丈夫。疲れて眠ってるだけだ」

「はぁ……、良かった。」

まったくもう、驚かせないでよ」

ツンツ、と隼人の額を人差し指をつく。

だが、彼は何も反応することなく、寝息をするだけだった。

「ま、こいつにしては良く頑張ってたからな。」

少しぐらいそのままにしてやれ。……もうすぐ教師達も来るだろう」
試合のときと違って、兄のような優しい表情で隼人のことを見る藤原。

「あれ、どうしたの？」

何か試合のときと違って、優しそうな表情をしてるね」

「優しそうな表情……？俺が？」

「うん、なんか弟を心配する兄のような表情だったよ」

「弟を心配する兄ね」

そう呟きながら藤原は隼人を見る。

「……なら、こいつは色んな人を心配させる大バカ弟ってところだな」

永瀬の腕に抱かれて寝る隼人に向かって言う。
その言葉を聞いていたのか、

聞いていなかったのかは隼人にしかわからない。

「それにしても、やっと戦いが終わったね」

「ああ。だが、これからもやつらはこいつを狙うだろうな」
あの方がこの力を恐るわけだ。

やつが言い残した言葉を思い出し、藤原は言い放つ。

「……そのために私達はずっと、この子を護るんでしょ？」

「ああ、無論そのつもりだ。あの会長に指図されずともな」
試合の前と今とでは、かなり違う藤原の思考に驚く永瀬。

「へえ、試合の前は『こんなやつの護衛はイヤだ』って言ってたわりに、

今は結構、やる気じゃない。どうしたの？……この子に惚れた？」

「ああ、そうだな。こいつの生き方には惚れたかな」

だからこそ、護らないとな。

隼人こいつをこいつにあだなす全てのやつから。

第19話 The hand of help, and a conclusion

この小説を読んでいる方の中で

Twitterをやっている方がいましたら、
フォローしてくださいと嬉しく思います。

第20話 After an incident (前書き)

やっぱり3人称視点、いらなかな？

書くのが超、疲れるし（――、💧）
o

第20話 A f t e r a n i n c i d e n t

「……う、うーん」

俺が目を覚ましてすぐに視界に入ったのは、一回も見たことのない真っ白な気色だった。ーというか、ここ確実に保健室だな。

「……っうー!!」

その場に立ち上がろうとベッドから降りた瞬間、何ともいえないような激痛が俺を襲った。

そのため碌に立ち上がることも出来ず、俺は再びベッドに倒れ込む。ああ、クソっ!!

この調子じゃ、会長と戦って俺が狙われてる理由を聞き出すことが出来ねえじゃねえか。

「……それに悠里の様子も聞き出さねえといけないんだ。こんなところで倒れてるんじゃないよ、俺」

半場、無理矢理に体を動かす。

体のあちこちが悲鳴をあげるが、今の俺にはどうでもいい。それよりも悠里の安否の方が気になったからだ。

ベッドから降り、足場に置いてあったスリッパを履きベッドスペースから出ていく。

「柊君！？　ダメよ。ちゃんと寝てないと！！」

保険の先生なのかはわからないけど、

女の先生がふらふらしながら歩く俺を止めに来た。

「……だ、だいじょうぶです。それよりも悠里はー！ー」

保険の先生ならどうなったか知っているだろう、そう思って聞く。
だが、先生は呆れたかのようにため息をつく。

「……隣の第2保健室よ。まったく、あなたたち二人はバカなの？

二人とも大怪我をしてるのに、相手のことばかり気にして」

「あはははは、すみません」

苦笑い気味に言う。

だけど、先生のこの言葉でわかったことがある。

二人とも相手の事ばかり気にする。ということは、悠里が生きてる
！！

そうわかると体がさっきより若干、軽くなった気がした。

（あーあ、そっか。さっきまでは悠里が死んでるかも、

そう思ってしまったから体が重かったのか）

と、心の中と思う。

先生に教えられた第2保健室へ向かうため、俺は保健室を出る。

コンコンっ

『はい、どちらさまですか？』

第2保険室のドアをノックする。

すると、中からいつも通りの彩葉の声が聞こえる。

この声が聞こえる。ってことは、やっぱり悠里は……。

「……失礼します」

一応、入室の前なのだから声だけはかけておく。

「隼人君！？ ダメじゃない、ベッドで寝ておかないと!!」

「ごめん、でもちよつと確認しておきたいことがあってな」

彩葉の静止を振り切り俺はこの部屋のベッドスペースまで向かう。

中のベッドで寝ていたのは予想通り、悠里だった。

「隼人……、お前、大丈夫なのか？」

だが、予想以上には元気そうだった。

「ああ、大丈夫だ。」

ただ単に全身打撲に、腹を刺されただけだし」

「いや、それは既にただ単にとってレベルじゃねえぞ」

笑いながら言い放つ俺に、悠里は苦笑いを浮かべながら言うてくる。

「まあ、いいさ。お前が無事だったんだからな」

「……隼人」

「ま、早く良くなれよ。」

そうじゃねえと、彩葉が心配するぞ」

彩葉の他に修史やアイリスも心配するだろうけどな。

「……お前はどうかんだ？」

「俺？ そうだな……」

心配しないっちゃあ矛盾してるし、さっきの戦いの最中で心配しまくってたしな。

でも、心配してるっていうのもなんか、アレだしな。

「心配してない」

「……………」

そう答えた瞬間、悠里が捨てられた子犬のような瞳になった。

それに耐えられなくなり、隣を見ると修史達からも批難の眼差しで見られた。

「ああ、もう！！わかったよ、正直に言うよ。

心配してました。はい、してましたとも！！」

それらの視線に耐えられなくなって、本音を若干、キレ気味に言う。そして俺の言葉を聞いた直後、悠里の表情がさっきよりも輝いていた。

……今、冷静に考えて思ったことなんだけど、悠里こいつって女みたいだよな。

何ていうか、行動がっていうか言動？

弟にしては姉思いすぎるし、たまに言動が女みたいになるしな。

でも、今までの行動が女だって確定すると、普通なんだよな。

妹だとすればこの異常な姉思いもありえるし、言動も普通。

「ー確認してみるか。
そう思いつき、行動しようとしたとき。

保健室のドアが勢いよく開き、外から女の子が飛び込んできた。

「おっはよーーー！！ 悠里ちゃーーーん」

「ちよっと待て！！ 俺は悠里じゃ……って、うわっ！！」

女の子の突撃を避けようとしたとき、

地面に転がっていた缶ビールを踏んでしまい足を滑らせる。

そしてそのまま俺はベッドに倒れかかった。

「いってて……、悠里、悪い。大丈夫だったか？」

一生懸命、悠里を気遣って言った言葉なのだが、

悠里からは返事が一切なかった。

「悠里……？」

「はーやーとーくーん？」

そればかりか、いつの間にか隣まで来ていた

彩葉が修羅のようなオーラを纏っていた。

「彩葉サン？ なんでそんなに怒ってるのでしょうか？」

「自分の手の先を見なさい！！」

そう怒鳴って指を指した方向は悠里が寝ていた場所で、
俺の手の先があった場所が、悠里の胸のところだった。

むにゅっ

「んっ……／＼」

「ーあれ、この感触ってやっぱりアレだよな。」

「ってことは、俺の予想は当たってたんだ。アハハ……。でも、なんでだろうね。全然、嬉しくないんだよな。」

「……何か言い残すことはある？」

「ああ、やっぱり悠里は女だったんだな。……以上」

「そういった直後、俺は意識を失った。」

「いや、彩葉のツインバレットによって意識を失わせられた。と言った方が妥当かも知れない。」

「……それと同時に思ったことが二つ、ある。」

「女は強い（特に彩葉）ということと、

「女の扱い（特に彩葉）には注意しよう。という二つだ。」

「「ーで、お前は何日間の間、ここで休むことになるんだ？」
「すみません。自分にもわからないっす」

後日、全身包帯まみれになってベッドに倒れ込む俺の姿があったそう
だ。

第21話 Team formation

俺の怪我が半分ぐらい治った日……トーナメント戦の1週間後ぐらいだった土曜の朝。

休日にも関わらず、俺達1年A組のメンバーは教室に集められていた。

「あーあ、今日集まってもらったのは他ではない。

先日、行われた【全学年混合チーム対抗戦】の優勝商品の話だが」

【優勝賞品】――確か生徒会執行部の話だと、

どこかの宿泊施設を借りることのできるチケットだったかな？

つまり、修学旅行みたいなモノが出来るってわけだな。

まあ、俺達が勝ててればって話だけど……。

そう、結果からすると、俺達は負けてしまったのだ。

修史の話の通りだと勝ったのは生徒会長様のペアだとき。

だからあのクラス全員が旅行に行けるといいう、ね。

「……なんと、優勝者のクラスから旅行券が回ってきたぜ!!」

紅先生がハイテンションのまま懷から取り出したのは、宿泊施設のチケットだった。

みんな、これには思わず呆然。

普通は喜んだりしたらいいのだろうけど、

なんて反応したら良いのかわからない。そんな感じだった。

「おい、お前ら。もっと喜んだりしろよ。宿泊施設のチケットだぜ？
その間の授業が全部、潰れるんだぞ……」

なんとも教師らしくない言葉を言いまくる紅先生。

「アアンタ、本当に教師か？」

心の中でそんなことを考えてしまった俺は、悪くないだろう。

まあ、そんなことを考えながら俺は、先生に声をかけることにした。

「……先生」

「おう、柊か。お前のおかげでチケットを手に入れることができたぞ」

「俺のおかげ……？」

俺のおかげってどういうことだ？ 何にもしてないんだけど。

「ああ、会長がな。」

お前のおかげで学院を守ることも出来たし、

生徒を護ることも出来たから……ってな」

「ああ、なるほどです」

……それ、俺なんかのおかげじゃねえじゃん。

先生に簡単に返事をしながら、俺はふとそう思う。

（だって俺は、悠里を護りたかっただけなんだからさ）
たまたま視界に入った悠里の後ろ姿を見ながら思う。

（……それに、あいつらの言った言葉が気になったしな）

――襲撃者あいつとその後ろにいる仲間の狙いは俺だった。

つまり俺に関係してる事件が起こってるというわけだ。

（どこかの組織の怨みを買っているのか、それとも……）
包帯が巻かれている自分の手を見る。

（この力が狙われているのか）

この力……その言葉が指すのは欠陥魔導士の力。

この世界にはもう、俺しかないと言われてる俺だけの力。

（この力が狙われている……そう仮定したとして、
何であいつらはこの力をこの世界から無くしたいんだ？）

1週間前、襲撃者が言っていた言葉を心の中で思い出しながら思う。
確かにあいつは『この力はボスの妨げになる』的な事を言っていた
はずだ。

（……だけど、なぜこの力があいつらのボスの妨げになるんだ？）

「――柊っ!!」

「は、はいっ!？」

いきなり大声で名前を呼ばれたので、肩をビクンと震わせながら返
事する。

――ああ、ビックリしたあ。

でも、なんか怒鳴られるような事、俺はしたかな？

「……大丈夫か？」

「はいっ？」

なんか怒られるのかな？

そう思っていたのだが、怒られるなんてことはなく。
あったのは心配の言葉だけだった。

「いや、何……かなり怖い顔をしていたからな」

かなり怖い顔、そんな顔してたのか。俺。

「いえ、特に何もないです。心配かけてすみません」

そう言い切って俺は、さっきまで考えていたことを全て忘れることにした。

（今、色々を考えるのをやめにしよう）
ずっと考えていたら、俺の頭がどうにかなりそうだしな。

「そうか……、あ、そうだった。

あと一つ、言っておかないといけないことがある」

一気に紅先生の表情が固く、そして真剣な表情になった。

「今年から、1年生も依頼を受けることになった」

ざわざわ、とみんなして騒がしくなる。

「ー確かに、騒ぎたくなる気持ちはわかるよ。

だって今まではずっと、2〜3年しか行けなかったんだから。

「だが、基本は一人では行かさないつもりだ。なので今からチームを作ってもらう。

……ウチの人数は40人だったはずだから、1チーム5人だ。

明後日の月曜日までに話あって決めておけ。……以上、解散!!」
5人チームか……。

出来ればチームワークとかを考えて、仲の良いやつと組んだほうがいいんだよね。

まあ、俺にしてはどうでも良いけど。

「……………」

教室を出ていこうとした先生は、何故かドアの前で動きを止めた。

「柊」

そして俺の名前を静かに呼ぶ。

「はい、何ですか？」

「……俺的には渡したくないんだが、

学院長からの命令でね。こいつを渡しておく」

先生が手に持っていたのは、蒼い宝石がついている指輪だった。

「……なんですか、コレ？」

デイヴァルチエ

「この前、お前が使った欠陥魔導士用の試験魔導器の改良版だ」

ヴェルジュ

あの魔導器の改良版……。

試しに指輪に力を入れてみる。

この前、なんとなくイメージが掴めた魔力のようなモノを、だ。

「なんだよこれ、すげえ」

そのまま思った感想を言う。

俺の体を纏うかのように魔力のオーラが渦巻いている。しかも大量の魔力が。

『うわっ、やっぱすげえ！？』

『この魔力、ウチのクラスの誰よりも強いんじゃない！？』

『こんなに魔力が強いのに、なんで欠陥魔導士なの！？』

みんなして口々にそう言っていく。

なんで欠陥魔導士なのって言われてもな。

――魔導器との契約が出来なかった。としか言いようがないんだけど。

「……まあ、このようにかなり強い魔力を纏うことが出来る。だが――」

パキンっ

言葉の続きを聞こうとしたとき、手元から何かが折れた音が聞こえた。

音の正体を確かめようと、手元を見る。

「……剣が折れた」

手元にあったのは柄から先がない剣もどきで、足元に転がっていたのは剣先だ。

「このように剣が耐え切れなくなって折れてしまう」

おいおい、前も思ったけどこの魔導器もどき、耐久力がなさすぎじゃないか？

まあ、人類初ともいえるような実験だから仕方ないっちゃ仕方ないけど。

「だから、学院長からコンパクトで

何個も持ち運べるように専用の入れ物を受け取ってきた」

紅先生が化粧品を入れておく入れ物か？と思うような入れ物を渡してくる。

その入れ物の中を見てみると、さっきの指輪が何個も入っていた。

「はあ……」

「だが、俺はこいつを武器としてあまりつかって欲しくない。

理由としては色々あるが、お前の力は制御出来ていないからな」

――まあ、確かに制御は出来てないだろうな。

その結果がこの有り様だろうし。

「じゃあ、どうしろっていうんですか？」

「……出来る限りこっちを使え」

手を銃の形にして撃つモーションをする。

つまり銃ばかりを使ってろ、ってことですね。

「ういっす」

俺のことを考えて言ってくれてるのである。と、思う。

まあ、銃が使えるんだから俺的には良いんだけど。

強い武器を使いたいって気持ちもあるんだよね。

――人を護れる力が目の前にあるのに、手が届かない。ってこんな感じなのかな。

（……強くなんないとな。

前の襲撃者みたいになら、俺を狙ってくるかわからないんだ。

もしかしたら彩葉達と一緒にいるときを狙ってくるかもしれない。

……だとしたら、俺は彩葉達を護れるのか？）

自分の手のひらを見る。

（答えはNOだ。

前の悠里みたいに大怪我をするかもしれない）

今は前の方の席でぼうつとしている悠里の後ろ姿を見る。

（あれだって、一步間違えたら死んでたんだ。
というか生きてるのが奇跡なんだ。

……アレは死んでもおかしくはない状況だった。

そしてそんな状況に持ち込んでしまったのは、俺のせいだ）
唇を噛み締め、手を強く握りしめる。

（――そしてその状況を助けてくれたのが、藤原と永瀬だ。

正直言って、あいつらがいなかったら俺と悠里はこの世にいなかったかもしれない）

お世辞無しに、本心からそう思っている。

――でも、もし俺がこの世にいなかったら、

こいつらが巻き添えをくらうことはなかったんだよな。

「隼人君っ!!」

そう思ってしまった瞬間、彩葉の俺を呼ぶ声が聞こえた。

「んっ、どうしたんだ？」

「自分が消えたら全て解決する。何て考えたらダメだからね」

「……彩葉」

「姉さんの言うとおりだぜ。

お前は俺がいたせいでオレにケガをさせたと思っているだろうが、
オレはそうは思わねえよ。だから気にすんな」

「悠里」

まったくこの姉弟は……、自分の言いたいことを全て言い切りやが
って。

「ま、それには同感ね。まだまだ短い付き合いだけど、あなたは抱え込みすぎてるっていうのはわかるわ」

「アイリス……」

「もっと仲間を信じなさい」

かなり上から目線だったが、俺が失っていた『仲間を信じる』。

その心をアイリスは教えてくれた。いや、これは全員思ってることなのかな？

「はあ……、そうですよ。」

あなたはもっと、周りを巻き込んで良いんですよ。“友達”なんですから」

「……修史」

「先生、すみません。」

チームの話ですが、僕達は隼人と一緒にことでいいですか？」
教室を出ようとしていたのか、ドアの前にいた先生に話をふる。

「ああ、別にいいぞ。」

というか、俺は元々そのつもりだったしな」

「ありがとうございます」

こうして外堀を埋められ、勝手にチームを作られた。

ーはあ、入学して早々だけど疲れた。

第22話 Only one decision (前書き)

今回はかなり短いです。

形的には？章の終わりって感じですが。

そして主人公の秘密というか、

あることがわかる話となっております。

では、どうぞ

第22話 Only one decision

「……うう、ううん」

チュンチュンという小鳥のさえずりにより俺は起こされる。

起こされる、そういうと語弊があるかもしれないな。

いつも寝起きは良い方だ。なので小鳥が鳴かなくても俺は起きていたはずだ。

起きなかった場合は、疲れが溜まりすぎてシンドイときとかだな。

「先週は疲れたな……。人を何人も殺さないといけなくなるなんてな」

まあ、最後のあいつは人ではないと思うけど。と、苦笑気味に言うてみる。

だが、気分は一向に良くならなかった。

……当然だ。

仮に最後のやつが魔物だったとしても、

人に似たやつを俺が殺してしまったんだ。

それに転入初日のあいつらは、完全なまでに人だった。なのに俺が殺してしまった。

――彩葉を護るため、学院を護るため。

そんな言葉で心一杯にし、何も考えないようにしていた。

だけど、事件が一段落した今――

今までの俺が行なってきた行為、全てが悪に思えてきた。

(……だけど)

目の前にある鏡を見る。

そこに映った俺の顔は酷く――まるで悪人のような表情だった。

「……………」

無言でぶんぶんと首を振り、冷水で顔を洗う。

(学院やあいつらを護るためなら、俺は……)

――喜んで偽善者にでもなってるよ。

たとえば誰かに『悪魔』、『殺人鬼』と罵られても、な。

第23話 Team formation (前書き)

……どっちのほうがいいでしょうか？

いきなり質問から入ってすみません。

“どっち”というのはサブタイトルのことなのですが、英語のほうがいいか？　こんな感じがいいか？　ということです。

どちらがいいか、送ってくれるとありがたいです。

第23話 T e a m f o r m a t i o n

本日、月曜日。

いつも通り学院に行き、いつも通りSHRを受けていたのだが、今日はいつも通りではないことがあった。

それは――

「あー、今日から1年生依頼解禁の日だ」

そう、我ら1年生が依頼を受けることの出来るようになった日なのだ。

ま、1年生全ての班に担当の先生はつくみたいだけどね。担当の先生の数は足りるのか？

そういう疑問もあるだろう。というか、俺にもあった。

で、先生に聞いてみたところ。

『2〜3年の先生もついてもらうことにしてるから大丈夫だ』と返ってきた。

確かにこの御時世、魔導士に就職なんて合っていないようなもんだけどさ。

少なくとも3年生にはついておいてあげようよ、3年生担当の先生。1年生には悪いけど、そんなことを思ってしまった俺は悪くないだろう。

「と言っても、今日は俺達のクラスだけになるがな」

その対策もある程度固まってきたのか、

依頼を受ける日は1週間に1日だけになっていた。

1年生全体で5クラスあるので、どのクラスも1週間に1回ある。

というわけだ。

「では、自分達のランクにあった仕事をしてもらう。

尚、自分達チームの評価を聞きたいやつらは俺のところまでこい」

まあ、ほとんど同じだろうけどな。ぼそっとそんなことを呟く紅先生。

“ほとんど同じ”

確かに先生はそう言った。

つまりはどこかの班は違う。そう言いたいかなのような言い方だった。

……言わなくてもどこかはわかるんだけどな。

どう考えても俺達の班はランクが違うよな。

俺以外の人の魔導士ランクが凄すぎるのだから。

で、俺は……自分でいうのは何だけど、戦闘のスキルが凄かった。

なので結論だけいうと、この班だけバランスがおかしい。

そんな俺達に対する先生達の意見としては

『期待の新人生』や俺以外の場合『天才』だろうね。

……まあ、どうでもいい話だけど。

――俺達の班だけランクが違っただろうな。
要するに俺が言いたいことはこういうことだ。

「紅先生、僕達のランクは何になりますか？」
ランクが気になったのか修史が聞きにいった。

まあ、当然だわな。

あんなランクが違う人達がいるよ、って強調された言い方をされたのだから。

「お前らのランクは……Bだ」

ざわざわざわ……と、先生の言葉を聞いて教室内がざわつく。

――無理もない。

ランクBとは入学してきた1年生がすぐになれるようなランクではないからだ。

主にランクBになるグループは、ほとんど3年生に多い。

2年ではたまににいるらしいが、1年でBランクはあまりいないらしい。

というのも、1年生で総合Sランクって奴があまりいないからだ。
いても2〜3人なのでグループになるとランクが下がるっわけだ。

なので、俺達が初めての1年生ランクBというわけです。

「……それはなんというか」

「これから色んなやつの僻みとかを受けることになるな」

そう、俺のテンションが下がった理由はコレにある。

要するに1〜2年……下手すれば3年生までの

僻みや嫉妬やらを受けなくてはいけないからだ。

そしてその僻みや嫉妬やらの真っ先に被害を受けるのは俺だろう。

――欠陥魔導士ディヴァルチエなんだからな。

今まで生きてきたなかで……何度、この言葉を使ったかわからない。
いや、わかりたくもないな。

本当に欠陥魔導士という肩書きのせいで――酷い目にあっていたら。

「柊、大丈夫か？」

前に起こった出来事を振り返っていたからか、
無言になった俺を見て心配してきた紅先生。

「あ、はい。大丈夫ですよ」

――もう、慣れてますし。

僻みを受けるのも、嫉妬を受けるのも。

嫌がらせを受けるのも、暴力を受けるのも、ね。

私事ですが、こちらでも宣伝させていただきます。

第8回 MF文庫J新人賞にこの作品を投稿します！！
……といっても、改変はしているんですけどねww

まあ、応援してやってくれるとありがたいです。

第24話 The scarlet starting point

「ああ、そうだ。チームを組終えたらこの用紙にメンバー、チーム名、リーダーなどを書いて提出しろ。以上だ」

あ、この用紙は前に置いておくからな。

とだけ、言い捨てて紅先生はさっさと教室からいなくなってしまう。

俺達のチームのウチ、一人も教卓に紙を取りにいけないので取りに行く。

その用紙には、【チーム名】・【メンバー】・【リーダー】・【副リーダー】と

それぞれ記述するスペースがあった。

(こんなに埋めないとダメなのかよ……)

と、思いながら肩を落とす。

――それにしても、

「ふむ……チーム名ですか」

「おわっ!？」

真後ろで呟かれたので、ビックリして飛び跳ねる。

「お前な……、ビックリするじゃねえかよ」

耳元で呟いてきたのは修史だった。

後ろ――肩の辺りから顔を覗かせこの用紙を見ていたらしい。

「……なんでそんなに驚かれてるんですか？」

「いや、別に」

「まあ、それならいいとして。」

チーム名ですか……リーダーや副リーダーなら

決まっていますけどチーム名は決まっていなかったですね」

え、ちよつと待て。

リーダーや副リーダーが決まってるなんて、一回も聞いてないんだけど。

「え、そうだったの？」

「初めてだったぞ」

「初耳ね」

いつの間にか集まっていた皆もそんな言葉を言っていた。

つーことは、決まっても誰にも言っていなかったってことかよ。

「あれ、言ってませんでしたっけ？」

「「「言っていない（な）」」「」」

一言もそんな話は聞いてない。

「じゃあ言いますけど、リーダーは彩葉です」

「ええーっ！！」

唯一、彩葉だけ驚愕の声をあげるが、他の人は何も言わなかった。理由としては一つ。

ー絶対リーダーをやるとしたら彩葉だろうな。

そう全員が全員、考えていたからだ。（彩葉以外）

「ちょ、私にはリーダーなんて無理だって」

「大丈夫です。そのための副リーダーですから」

無理無理、と首を横に振って否定する彩葉を説得するかのように修史は話す。

まあ、副ってつく仕事は大抵……ってか、全てにおいてサポートだからな。

副リーダーが良かったら、彩葉も納得するだろう。

「……で、あなたがそこまでオススメする副リーダーは誰なの？」

「そりゃあ勿論……」

ニヤツと口角をあげる修史

（あれ、なんか嫌な予感が……）

「隼人に決まってるでしょう」

「はああああーっ!？」

いきなり副リーダーに任命され驚く俺。

正直に言って……もしかして俺かも、とは思ったよ。

けど、ディヴァルチエ欠陥魔導士だから無いと思ってたのによ。

「さあ、隼人が副リーダーですよ？」

つまりリーダーの補佐をしてくれるんですよ？リーダーをやってくれませんか？」

彩葉に向かってそんなことを言う。

（……こいつ、俺を餌にしゃがって。

俺にはそんなチームを纏めるような仕事も、リーダーの補佐も出来ないっつーの）

「リーダーの補佐……うん！！ それならリーダーになってもいいよ」

頬を若干、赤くしながら元気よく返事する。

「ーおいおい、何か意見を聞かれるまえに決まりそうな勢いだな。」

「だから、一言も俺はやるとは……」

「なら、決まりですね。」

あと、決めないとイケナイのは……っ」と

用紙のリーダーと副リーダーのところに、修史は俺と彩葉の名前を書いている。

「チーム名だね」

「ーダメだ、こいつら。」

全然、人の話を聞いてくれないや。

「はぁ………」

体の奥底から出したのか？

どれだけストレスが溜まってるとんだよ。

そう言われそうなら深いため息をつく。

（……もういいや。好きにしてくれ）

目の前で楽しそうに会話する二人を見て、

抵抗する気もなくなり、何も言う気がなくなった。

そんな様子を見てアイリスと悠里は、同情したような目線を送って

きた。

……やめろ、そんな目で見るな。泣いちゃうから。

とまあ、こんな感じにはしゃぎながら全ての項目を埋めていった。

それと同時に今、この場で完成したチームがあった。

チーム名は【スカーレット緋色】、少なくとも3年間は一緒であろう俺達のチームの名前だ。

ちなみに余談であるが、この名前をつけた理由を彩葉に聞いてみたところ。

『えっ？ 名前の由来？ そんなの適当だよ。』

アイシスって、このクラス唯一の外国人なんだよ。

だから目立たせたかったんだけど、イケナイ？』

……だそうだ。

友人を大切に思っているのはわかったんだけどさ、

その友人の家名をチーム名にするのはどうかと……。

ああ、でも……だからこそ緋色ってつけて

読むときにはスカーレットって呼べって言ったのか。

第24話

The scarlet starting point

(後書き)

ちなみに投稿してみる理由は、自分の実力を試したいからです!!

第25話 Vice-chairperson

「はぁ……、なんで俺が行かないとダメなんだよ」

愚痴る俺の手元には1枚の紙があった。

これはチームを作るために、

指定した相手に絶対に見せないといけない紙だそうだ。

チームを結成するに当たって必要なものが二つある。

一つ目は言わずともわかると思うが、自分達の担任の了承だ。
これについてはまあ、簡単に手に入った。

そんなに簡単に手に入るなら、

別に憂鬱になる必要はないのではないか？

そう思う人もいるだろう。

実際――俺もそう思っていた。そう、思っていたんだ。

もう一つ、見せに行かないとだめな場所を見るまでは……ね。

コンコン

『はい』

目の前にある部屋のドアをノックし、相手の返事を待っていると、中から女の返事があった。個人的には、あまり聞きたくなかった声なんだけどな。

「……1年A組の柊 隼人です。」

チーム結成許可書にサインをお願いしたいのですが」

『入りなさい』

ホント、この上から目線の口調が嫌いなんだよな。

まあ、短にそんな口調のやつがないからだろうけど。

「失礼します」

ドアを開け周りを見てみると、生徒会執行部のメンバー全員がいるようだった。

……こいつら、ずっとここにいろわけじゃないよな。授業だってあるんだし。

だけどこの集まり方は異常じゃね？

だってさ、ソファァーが3つほどあるけどもそのうち一つで藤原が寝転がってるんだぜ。

絶対にずっとここにいて暇してただろ。

と思っていたのだが、俺の姿を見た瞬間……藤原は起き上がった。

「……おっ、やっと来たか」

「隼人君、お久しぶりですね」

暇してた藤原はともかく、書類を整理してた永瀬まで挨拶をしてくれる。

「お久しぶりです」

「水城さんの様子はどう？」

あれからずっと気になっていたのか、永瀬は悠里の容態を聞いてき

た。

「あ、大丈夫です。医者の処置が完璧だったのと、先輩達の助けが早かったので助かりました」

「いいえ、私達は何もしてませんよ。」

水城さんはあなたが助けたんですよ。私達はあなたに力を与えただけです」

ソファーに座りながら『俺は普通に戦ってただろ!!』と騒いでる藤原を放って話を続ける。

「ですが、アレがなかったら俺も悠里も死んでいたかも知れません。なので感謝してるんですよ。永瀬先輩」

「隼人君……」

「あと、藤原先輩にも……」

「はっ？」

いきなり話を振られたからか驚いていた。

「あなたが戦って時間を稼いでくれてなかったら、俺達は死んでましたしね」

頬を掻きながら、明後日の方を向いて言う。

……やっぱアレだな。

お礼を言うのとかって、なんか恥ずかしいな。

顔見ながら感謝の言葉を言うなんて出来ねえや。

「……………」

「これ以上、この部屋に男を連れ込むのだけはやめてね」

素直に感謝した俺を見て、絶句した藤原に永瀬は一言いう。

「連れ込まねえよ!!」

「……そうよ。連れ込んでもらっては困るわ。

まあ、私が居る限りもう男を連れ込まないようにさせるから安心して。

するのまでは反対しないから、するのなら他所でやりなさい」

「はいはい、わかってますよ。

……って、勝手に俺をホモキャラにするんじゃないか！
うわぁ……、と藤原を見て引く。

こいつってやっぱりホモだったのか、どうりでな。

1回戦で戦ったとき、怪しいと思ったんだよね。

永瀬も言ってたしな『生徒会室に男、連れ込むな』って。

「ほら、見ろよ。お前らの言動で1年生が引いてるだろうが」

「……だって事実だし」

「まあ、いいわ。どうでもいい藤原の性癖だしね」

どうでもいいなら会話に出すなよ！！とまてしても騒ぎ出す藤原。

「で、柊君はコレを渡しに来たのよね」

あれ、スルーでいいのか？

と、心の中で思ったりしたが藤原なんてどうでもいいのでスルーする。

「あ、はい。まあ、そんな感じです」

「どれどれ……、おお、いいチームだね」

「ちょっと私にも見せてください。

……うん、これは凄いね。1年生最強って言ってもいいんじゃないかな」

（これはそんなにすごいのか？）

目の前で騒ぎ出す先輩達を見て思う。

「……へえ、君が噂の欠陥魔導士ね」

ふとこの部屋に通じるたった1つのドアの方から低い声が聞こえた。振り返ると短い銀髪の男がいた。

髪の毛にパーマを当ててるのか、規則良くはねている。そんな男が。

「初めまして、かな？ 柊隼人君。

生徒会執行部副会長の【霧島 悠斗】です」

第25話 Vice-chairperson（後書き）

前にMFJ文庫、新人賞に出す。と言ってましたが、その一ヶ月後のファンタジア大賞にも投稿します!!

勿論、違う小説をですよ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8895v/>

Valche 《ヴァルチェ》

2011年11月27日06時54分発行